濫觴無底抄

あつい

特別
へ12
1077
10

早稲田大學圖書

利
1077
910

特 1077 10

葵

私 源氏十九歳卯月より廿歳弐年

けのりりみえ

廿一歳 源氏大将にて始る此巻数仕存為従将

源氏大将為東宮傅将力事 東宮ハ冷泉院也

お方姫又為斎宮事 秋好中宮是也

斎宮卜定す 地識のけまゐりならすともいへとも

去年卜定ありき一 三年斎とりて伊勢へ下り給ふ之

葵上懐妊事

弘徽殿后腹女三宮こそ斎院になり

四月斎院二度御禊あり

大将君為勅使参議供奉了
葵上見物與六条御息所争車所事
殿上将監勤大将假随身了
賀茂祭日紫君髪曽木事
与紫上同車見物祭事
源典侍折扇書出哥送源氏車叓
葵上煩物氣事
六条御息所生霊事
六条御息所同煩心地源氏見出訪給事
斎宮可有安度御禊了

葵上生男子事
夕霧大将是也
八月廿余日葵上俄卒去了
歳廿六
葬送鳥部野事
源氏君籠居喪服了
九月斎宮入左衛門府了
六条御息所送付菊枝文了
源氏見有御返了
同月斎宮入野宮事
十月三位中将為婦服参源氏方事
源氏折撫子花以若君見比乳母宰相君歟

文清方事

源氏与葵上女房中納言て思召給す

葵上中将君源氏君始出仕事

大殿於源氏々曹子刀人半羽等来行す

源氏参内院　并　中宮行す

若紫文袍着て縫す

於二条院服す

素服三ヶ月也葵上八月薨去十月除

服者但九ヶ月未満除服あるへし

とふらひ両對へわたりなふらりて

暫者服とさへりなれ

源氏君与紫君始婚有密通事　女房年十四

三日夜餅事　号子しとす

廿二歳　大将

正月一日来参して拝す

来大殿於諸見お文清方す　文清方ハ葵上ノ母宮也

葵

河　以哥為巻名　源清

はかなしや人のかさせる葵ゆへ神のゆるしのけふをまちける

巻名源内侍与源氏贈答之哥なり

又賀茂祭の事を詮とする之　源氏廿

一歳より廿二歳の正月迄の事あり

廿才のとしの事をのするなきたり

みすれ花宴より

私云源十九才の四月より廿才の

年中の事見えたり

年の紀略く
花宴とて巻名とせり源廿一才の月
紫上ハ十四花宴ハ源十九才の春きの
事とらく存ハ廿才の巻ハものぞりよ
ひらうらう之し旧説ニ紫上と花宴
ハ同年の事よいへり是れニ依きて
六の類あり一類云二条大臣ハ花宴ハ
三月下旬の事也紫上の新枕の後朝
そに月く五月ハるいくりくハ日ねも

年號ニ朱雀院受禅冷泉院乃
立坊源氏君ハ任大将新枕葵の
卜定も条しのすいつまふ花宴
まへきそや　二類云花宴まとりハ
源氏宰相中将十九才とまうすハ源
氏十九才にて大将ニ任し紫上ニ
若菜巻ニ廿ニ一あまりて宰相ニて
大将邑なよしいふ但其の詞ニ遠
あるべし　三類云花宴年ハ紫上十二

や葵上よ新枕なりあり十二さいまて
夫婦なからむつましからさりけるか
つらし醫書よは女子を十四まて
はしめて天癸いれは男子なり
とみえたり　天癸とは月のさはりを
いふなり　已上紫云花宴なりしは冷泉院
二歳之澪標の巻より春宮まて十二歳
の時御元服ありとみえたれは二年たれ
不足なるに　又紫云冷泉院御譲位は二歳

御新院よ入内ありしとて御たくへあり
まさしきおほきのきさきよ入内ありしとて法
譲ゟ出生にて御譲は二歳の譲也其
不足なり　哉は御度の譲同月よ
あくしや同月の日はまへ侍るき也
六歳之伊勢斎宮とし一代に一度也
あり世よ秋好中宮の前斎宮たち
始は朱雀院受禅の時の
あれ小世に小沙宮は五年内へ参り

一巻……

給へかりしと拵しさいらとありて
此秋入のふとはりもちれしハ年華院の
ゆかりとうけのふすハ蔓来もりハお
此月と知へし此字の数よて源氏
の但大将ハ廿一の月と定侍る之
華かりては　関年の即位ありけるかり
何
桐つ不帝の位とさら也浮すや　寿秘目
花
ミ自とつ不の位と年華へゆかりのふ月之
此月花宴の頃すハ去年ある

東山ノ一禅師作
一巻所持り

うえし但紅葉賀巻よみかとおりぬ
さ世給ふんの流心つるひちかしとあれハ
去し年花宴のは夏秋のあさら
へきにや
関年云此物語よハ御即位大嘗会なと
の事とうれしの宗祇法師一禅へ
さつけゝらう一冊ありと称
秘
給つあらく　年華院の代始かれし
二条大臣弘徽殿女御あまたありけれ

御うつくし須磨の御代まてな
きゆへよろつれ心にたかひともにも
うまきことしもや

な
松うしとハ花つかれ中文のひとまち
まく人のやうに読よそひさつひ枕
つるすといへりこし

私云此縁め□

御身は庶人ともおさも　関守大将り
かりかふんこもりや

花
大将ふかり給ふやや

私云寧相まて通大将や

松
大将ハ職ある官之過分なるとさまさまの
てん奥するやうにてたかくしし御
しのひにおもきさうともかくこそや

葉
此洞も大将と見てたり

葉花相流　荒　大将にハ三位中将寧相に
なりせ給て大将かけさせ給へ寧相の
大将ときこてさみするといめそてくいま

めし
後二条関白師通　嘉保元三廿七任之年
同四月三日兼右大将　右ニハ上部拙之
あくもかしこも　秘　宗清集ニあらすや
私云もうしこれし　いうハしれひ
語つうなくしや
うけさとなさの語むくひおやまとわれよ
つきうきさ人
む
つきうき人ハ有つれ中不見せ　秘奉日

河本
これをたのむ人とたのむむくひりや
わかたのむ人の我とおもはぬ
私云源氏清書ひありきしもあすうる
ぬ事ふめてしのひつかのひ御
きしへもらくたいよれハ源への
みのあり人あわへありやそれむくひ
みやまと源へ有つかれいはれし佐
まうしたいすりまといつやるとよれ
はれあるきしといつうるとれ字たり

ろ

いまは御してびくあり　足らぬ陸て

菩提に佛あれ是をといふ

よき人のやうまて　ね 佛脱(ダツ)庭おりて

よき人のやうに菩提にまそひたりし

ますなる佛びくしるさとや　尊月

今きいれは　ね 弘徽殿せ

む 菩薩院佛経まつきのに成る弘徽

女御と見え后宮とませ　尊月

同年比丘よりおに立后なるべし

松三江華厳殿にて菩薩女御中宮に

なり給へるがまさ恵も代はなり

成めれはらさびろき佛経なりと

弘徽殿へみまれ給ふ行はむ人

秘 かやうに院に菩つれ一かに御まうすと

心やすくて弘も後は内裏にのみ

さるひなみとや

さるやまとけるなり　ね 菩薩は人に入りて

御しまゐらり
御あそびのまくと
秘
蹴鞠とよむなり
いはれは御ありさまかし
御位共八分論
おもしめすまゝにせ後よりありて
さまさまの御出家すへきまゝ在
後ハ今の御ありさましもとハ以前
昔ゟ長安とり
花
冷泉とは東洛と申
すてまはしめてみたり三坊ハ文
様のはのすゝみへし

秘
冷泉三坊におよそへし源氏の
時の申しとや
私云冷泉坊ハ各別小東ハ綱ひ
てまり後におもくすまし
ハ院中文いつれもまた同中けり
のうりハ御門の御心と色
大将とのよりり
冷泉の御ありけり
秘
三の申と後へ給ひけりせ
源氏時三本の大将やうの茅生にハ廿よ

黄山
写本朱アリ

一 あまりて大将とよはれしあり
参議大将と並ふる例 何海こくり
草花物語 卅九
これこおほり後まゐる男ら家
関白めや

む
源氏と大将といふ事は物語には
まつ大将を参議なから大臣まても
兼帯するや

河
大将 天平神護元年正近衛府

平城天皇大同四年四月廿二月改近衛
大将藤原朝臣内麻呂 大納言真楯男
為左近衛大将改中衛大将 坂上田村
麻呂為右近衛大将 従三位苅田丸男
参議兼大将例
藤原房前 中衛大将 同豊成 中衛大将
北己下十人略之
藤常行 右近衛 同伊平 左大将
河よの手すり下十四人 中略之

かきりなくこよなう　関守源氏峯せ
秘
春つけハさらにいひしとおもふなり
私云此義也
さしもやかの六てうのみやす所の
弄
記者の詞也　中宮ようすれやうふかけせ
秘
御息所とハ前坊御子斎宮をうみ給せ
前坊乃姫宮　秘 前坊とハ東宮と稱也
斎宮の事　小一条院の事にあらし
坊とハ東宮を稱するせ　花日
稽

な
秋好中宮ハ前宮の御むすめ母ハ
六条院御息所也　前坊上宮ハ去年
御あらそひきよや此秋の宮御入
斎宮より入てうち参文明年ニ斎
此おり
私云前坊桐壺院の御弟也
前坊ハ御けしきハ
秋好中宮也代の始よハ必受かけ給せ
弄花
去年朱雀院代の始よト定して

斎文と定られて今もかく定り入
給ひ明年より始へきせ
卒　卜定ありて三年めに卜定給へきせ
このか秘に同し
斎文事
河　崇神天皇六年以天照大神託豊鍬入
姫命於倭笠縫邑以大国魂神託渟
名城入姫命祭垂仁天皇廿五年丙辰
三月依神宮御託宣奉祝伊勢国

五十鈴川上以第二皇子倭姫命令
著御祭給是斎文始之
景行天皇庚子廿三年以二皇女奉仕 一云
天照太神
延喜神事式曰凡天皇即位者定
伊勢太神宮斎王仍簡内親王未
嫁者卜之若無内親王依世次簡諸
女王卜之
大むね此心をえへし　秘　六ヶ是所と漏れす

めうろうり

私持り長ホれ之くされの例よ去れとも
こしおかつりかされうしありハけ長
所うくし津をとうりかみさり
たさうまさ持ありさ海れ　柿もれおさうふおハ十念也
とつ毎て　ろこつ毎てせ
くりや毒ましし　秘　源れ口もとろり
ろうれハらの所よゑしてやくろほ
とおかともとうり

私ぎかめりにれ長ホれないし柳萌
ろふふゑれ車あるゑひのかにあ
りてもまし葵れりのけるまあは
まのくろかありゆくし
俘せへはのまいくろり後く
候へももろかり　桐みくとせんしめて
候へもとろけかと
私ぎかろかハ源の津をとりつき
て持り長ホれ俘せへやくろんと

なかりしかりしや
右京は　抄　文みしは御おぼしで右京左
お坊せ御門は成せ　お坊は御甚下と
なかりしときめかし
御てうあいかぎりし事せ
をしうへの　源のよれつけの人の中
よまて御しゆふすゑの御せ
いとをしき事　ゐすとるとこゝりて
見らせ申しはかなくしくよて御すゑ

ろいとおしき月一川きて斎宮とも
申させられて心をしろへ宮し
斎宮とはみてとも　秘　秋好と御門
は御子をのやに御心よおぼしめし
いかきにつ事ても　何月に事てとを
み中すゐん源は御ひ御ふかつらは
とちかうまいらせられるしと
心のまさひよさしをせて
かりそあるかゐすとはかしひかふ

すハあしきすくあり侍ことよか
らせまて迚も花もむ絶りきゆる
へきやうなくし頃はなし
在れ人のりくへきすとや
よう侍りらふて　秘源の心くん作りな
れ御しあふく
人のさめ　秘まさ侍門の流ひかれ之
弁桐侍門の源よとし流れおやかり
六流是非の批判事ようり頃なり

すふるてり　　秘伝
事しらぬ人　む盗つかへるも作し
すすや
秘事ちつ不人侍ことゝおかろけても
きさしめしてうとや
まさかく流みてきさまへめし
不秘侍門の流数別より源れ文
くおうすんや
人の侍るもわくさめを紀当しう

此中将よ一旦凡世まてうつく
しくなり給へハよめつゐれあさくし
きゝ好文れ名のもにゐうやかわれさ
めし人のさあふれ面とにいと高きさ
かり清長不と源とのみふハ似合ぬ
とやいとしもへしろしとハ清のれた
かせふつさそいよくもへとしてハ
たかとうかり源氏之
まきあつかれてハ　秘名うふ淡かれかれし

うきおしめしるうするゝらい
まてしの心給ふよしけり
女もみけうさき清よりの心　を　清長平大九源
共一あれとしけうさきといふけり
秘此次のとし清長不共よていゝ内と
兄源しくみやすほを源よ八九たの
みかり　弄月
あろしけ給ふぬ　秘みやす不の冷泉
さうせへよ源へ新砂のあうし之

それかたいひかさ海に　弄秘　源氏心と
いふ御息所の御むすめにたちて思ふ
やうにてたまてふくそれてそうし
給ともやと御心ハうしめし思ふ給や
松云とてるまてといますて源の
心ろとも
めんふきさしめしいまし
松御息所の御むすめし
ふかしもうつしぬ

松源の御こしやむしらぬこと
たかしうけさけり　秘　御息所の心うかり
松云池まきさしめしいれ在れ人も
志りぬうしなりけれと源のなそ六
いうし給ハぬやうれハ女んとかりこ
しれらひさうと御合ぬとして
み給ふうり給それに源氏志ら
してとさらしたりて人五給ハぬや
それとさゆうるし流息所れうしま

頼てまれに只ふからぬゆへ小
わらんとけぬきし氏かこほけす
みし行ふよもあゝしてみや
すおれん件に末りみひくや
あきらにれ姫君
秘 桃園式部卿宮の姫なり
清少納言もさらにかす始終に記かと
まてたりし人く 槿の名を第廿巻
其よ人のさまにしらみすゝ 寄同
松云かゝるうと ハ六條息所のうへと

此人ことく頼ていよくれ心おさめ
頼しや源氏物語の一部婦貞女
槿姫君と空蝉とや
秘 六条御息所ならで
人ありしと
いとたかきもゆくかり
そのあきらかにさしかりし此をかくも
源よりつまに御文かはあかゝり
それも大さゝれをすのいりはかりや
うれあひさのを事しるさしや

さりとて人みて
な
おさなかハ源に先立ようひさ給ハぬ
人さうらはりきてハおめ源りて
うしと人ははとうらし源てかめ
りくつかり
おか筋りハかくのこと　葵上之
くのことハ清り是示の几又嫉妬
宗うとれ事く
あまるまてまね　秘
葵上れ清方にち

かすれまとも源れみてみ給
ハさうゆくふくりてえんすえきあり
もうまさや　関中源氏ていくね
又れ称く
心うしき清母れ　な
葵上れつうり氏や
秘
懐妊せ
めつしくあされし　源れ心かり
まれもくうらしきもめり
足ハ父大臣母父いトかう（一

ゆしう　あふくたまふらんや
さぬし清てしみ　清衫うましに
たりしとこうとハ　秘　ゆす玉へらん
あうさぬ之おしろさうさ清よし之
（む）是ハ六条らやまむへいしさ之おや
こさといふ
関守清り甚玉へやまいおよ方しれす
ありさぬりふしみ之されおかりけ
といふれしおしてうけの詞之

その比斎院もおり弁経て
秘　此斎院られとも寺日琵りたり
みふらり　弁日

斎院事

河
嵯峨天皇弘仁元年置斎院同以
皇女有智内親王　母交野女王　為斎王
延喜神事式云凡天皇即位定賀
茂大神斎王仍簡内親王未嫁者
卜定之

誕生まして後ハかならひまうし斎院
ものせ給ひしおりハ此斎院に
こさ侍いろハ女三宮ゐ給ぬ
秘
弘キ殿の御腹花宴ニ御裳着す
みし人のうち桐壺帝第三の皇女
御母弘キ殿の大后也
公
延長式云凡定斎王畢即卜宮城
内便所為初斎院先臨川祓禊
乃入之云斎王於初斎院三年

斎王其年四月始将祭神社先
択吉日臨河祓禊ゝし即廻帰便
留野宮　凡斎王毎年四月中
酉日祭上下両社祭
今案賀茂の斎院ハト定ありてハ
東川（かもかは）よのりし祓てみそきなありて
まつに初斎院へ入る初斎院とハ
大内の中ふ大膳職或ハ左近府を
卜點してそれにて三年紫野斎院那

あり其日の七つ月小御中より入まいり
給ひしとて然の御事吉日とえらひて
まいり御礼の月日を別当の御宿にて
入まゐらせと二度の御礼とかさねて
中の酉日かしの社へまいり給て本事
にまゐらせ給ふや毎日の御礼は必吉
日と定めらるや今女房は桐壺御
門の御譲国の往ト定めて御
弁院へ入まゐらせ御祝の事は式

相続よりみとす今は子まて山は姓家へ
入給ひしとて御二度の御礼とてそれ
出ては御祝のよは勅使参議一人つかは
れ二度の礼は大納言中納言参議
以下あまたの供奉まいりの御礼は八
一か月の供奉をつけさせは二度のもとります
さまりての事うけとりの二度
の御礼給ひしより　御祝の事は
みえたり

あらしにかり
秘 女三宮の御琴に三の絃を弾すみかと
はつかしく心かよはき事也けり人
あて文をさぬさうへき 秘 おなし五の絃かきへき
人のまさしなたに五の絃をしや
くんにさうれしと 河神 日本紀
私 記事
今しとみさうり 秘 何かはし人かや
関事定りくらゆも別して心き法

くろうと人はかり事とや
清けいのほうんたちあつめりし
む 庭鼓まは二度の禊の勅使は公卿
中まてん各一人殿上人二人は陪従各
ハ人をへて十二人勅使せられけるす
定まりしハいつり源氏大将為政二
人のおもひあへしまれなりて足と
ほまけまてはいつハ二度の禊から
ひかりさ物く 隠 うまれて参明まう

さりまさしくりつしくきこゆすかや

秘　弄ノ義　花ニ同し男らし

斎院とト定して二夜の禊あり

是ハ第二夜の禊とみえたり　花宴ニくり

たかえとも　秘　人とえりいさすなり

下さまの女らうへのものみなれなんなるへし

左　御禊の日の勅使なと深紫

とされるまハ唐錦また倭錦とも

ちる杏葉とつゝかり

秘　かうりの随身ハ深紫まて下

さまの人の様と見えよ陪て見らく

関書大なき清水あちらくよとら清

らひらうらくしぬうきりぬきさり

りかきうせうかや

よりわきたりせりまて大将のきみも

はうらまつまゐる

秘　大将代なきの例　葵に　みえたり

河　斎院御禊大将お延例可勘之

な

國史云　貞觀三年四月十二日丙寅賀茂祭内親王臨鴨水修禊是日使入紫野祭院勅大納言正三位兼行右近大将源朝臣定監禊事とて祭院御禊に大将供奉の例せ

地下人車心つひしきり

御禊とおもして川つらの

源氏君うとれ代なれ居かうし

一条のおほち　此大路大内裏の北の

大路なりとりて一條ひろさく

ひろさ廿丈也　御桟敷なり

所れ御さしき　御禊の使より

人のうてくらさく

たふ人のりしハ勾欄くり地下人の袖く

らさくまくしいふ地下人うりしや

秘

葵上く

大殿うりハ

御心うらさくうやましうれハ　葵上上

流さうとくしくてかゝのおとの

かくりし後ハぬまりて懐妊ゆく
たかしうけさうましうり
いてやとのゝとら
葵上まさまぬ人てれ子の御息
ところめなうりまれてかりし
のひかさ海まてみんハおさかり
きらんるまし思ようり
りふれ御息よハ大和國とよう
とようへてしハ御人かさしぬ世ろれ六

さえ足とりんなまりんとみれ見死ええく
葵れゆらん十まりきハあまりみるまむ之
左文をさしめして　再秘　葵れ母えく
女房たち達れ御中まと左文のさまかつ之
御まちらもうるしさ　葵上れゆうち之
まかぬ人てし　とのくの御前理
なりと宣て儀よりよりし出かまく
めてし帯せて　御東れ代れ人
うてとふれなてさかしく

織りめさし

弄 車のうら下ろされきみけふふけつり

秘 織うりゆへみやすん所の

日くけゆきて

人も看さし海り車のさて下か

ととをおりましきや

関守かやうのありきさるましとなれ

きあしきりうり人のけるともうり

みくことをうつす待つさてうるぬへし

ゆへ御車の下おろへひもえしや

こし趣もわきしらるぬ　葵上の御息所に

御出の桟敷しけりあへぬさ海とへ

ひきしもうりそちわりたるま

是ハ姫うりきてう御息所車のをは

ようりくひさてきてまちうふ

よそおしくいよりくちわうふや

いまてゝ葵の御息所の車あらう

ようりしくとハ榻としくし車

ねおしあまきく河りて御息所の久のいけ

うけ玉ハさてまうふく
らさ女房車おりてゆしくの車ゆさき
ひさしと
秘
新人ノ乗也
新人うしハうすてよ女房車ハ案か
くさすり下とふ見すまりて葵乃
御ゆかりしとさそんとさしのまされ
ふや是持りまう挿之女車ゆ乗
中に六条の御息所の車をかりや

あんころのさこうかれしかう　網代車　つまとこ口 ト手く
ゆあんとくありけよしへしこ是かと
つゆふかくのこし
な
凡車ハ唐庇檳榔庇毛車ホハされし
檳榔ともてふて尼眉半蔀網代ホ
りハらかりとふまてとれ系れ
網代ていつふしさきいろさうし紐尼眉
まは青ま濃の下まされしとかく網代ハ
そ下簾とうけすとして女房ハ乗用

これハ八葉の車にて下すたれして
あるよ侍れハそれにておはしますか
ろへしすたれかけたるとふか
ひたくとはふかり
関寺みやこの山ふかくいるさと
あつひたり車よのりのりて
いかりいりて　御息所にのりゆふく
しのふさかなり
袖くちりのすそかさみ　汗衫きぬの

うへよ見すかりのや
唐庇り車とまうすとは下つかまて
しきりてきみハ妻女のるあり
とけつふ屋つれしかう
とさうとハわさと屋つ出ひかう
殊のあつハあるまし
車なり　いまれしも御息所の御
なれ女房うちとなるへし
さやうにけしのけるハ　御息所方人のせ

自余の女しの中には作しの事
書しとそ
いつみしわつきぬもれてひき
いはさらしとは清盛なられ人も
あねかされ人なとうり
秘
行きりの事も沈評しるゆゑは
制止ふうりきうき
大とれしくしさはなんのへ
な
地下れおゐや

あふひのうへ御やすむところの車に
俗まいうりへしうらし
東宮の御母御やすむところしみゆる
秘
葉子の地の候や　源のうとしく
たりし事すとをひみれ
源つけふうえし
秘
人あしらわ
ほしあしつかしと
ときれしととうり
関守へやすむところぬ御代まれ

人の生れさせおはしましける人にて
よのつねの人なかり
さはりふてはゞかりはゞかり
似 せかいらせらといふなり
葵のうへ人のいふなり六條御息所
やまひてうそれしなハいよく
庭かいのせそなしといふなり
おほ成とりかけける　葵上方の人の詞
を 豪家之きんりんなりといふなり

源とはう撰つまハ四字の人なましいや
それ御なされ人をも　されは御なさては源氏なれ
人なりあまりれ御代まハ又大臣人をも
おの源の御方の人もおほえその源氏清
なされ人を御息所なれ人とうろ人ある
これハ笑止なりとも人なり御息所
の方人をんもいうまてそしられ
してありしなり　関中同
秘 御息所とハ大略きれなし今とかりて

ハしりぬかをつかふ儀ハ叡覧れ
さきしをありくとうけりと
私口此儀ハふしんあり
清井ハ御車ニて　葵上かられ車をと
そうてうしへうりや
人々ふひ　河奥の人給　御車乃之
清ハ御し枕草子云とき乗れ下の車　権記多り　此名
乗人のまひうをつかきりつきてふく
出車とハ云方より枕をしれてれ乗人小

多まふのく人給ふなりや枕草子云
下ものく乞のきうりくうるまひとき下乗
御車人と海ひ川てきておもく
くうとうつてまふらんとすらんとみる
かとハ御おそて多ねおりふ枕りてふる
車ふしをまふれ常にまさせてしとし
をし中すれて押しみす　御目示此清
車のさ海く
心まりしきとハ　ゆやまりしきとハ車うると

すのけしきて物もみぬさぬかりけれ
まよりもわきてすりしきひ給ひけと
こやみすと下をまりてはよしさし
のけしきを給ひちおしくさ給
とく見えけりのあまぬへきりしめし
かくやりきし　秘　清月不の心
さちおもてされをしおかれて
河　昔ハ女房車にて榻をとてまつ絵
弄　一物女車にハ榻を用ふのみなりけれ

秘　屋とうんかあく見物にハ限さるへし
牛かとろくしかや
　松牛かうらハ榻を用うるなきや
車れそうにハ
　牛を用ひは流用く　桃花流
何にまいらんとおもふには　清月不れ牛へ
物ありえて　見物をもすして
そとかいてんひよしも　あまりみ物れ
人の恋さうり

ちらりぬと　こゝや秋深かりけるらん
つき人のはおれなり　清見潟のさきの
つき人を源なり
さかよりしや　みやすまれ御中と
おもしてうけりき
さしれうしまさにおもひはまや
河水と浮様なり
さしれくまひのく海川の錦とめて志い
水かくかけをさにかん
な
乱をとまかんとなくれさまれらに

こまあらぬハつまるとも錦かき下れ
清見潟のまへ　乱とのゝみをし川
れつれるきみておわ
私乱をとまらんの河をとうた
関守は川の古今秋の紅葉乃あふれ秋
事またりありてなりしろ
弄
ひの紅葉し河は錦とめての秋をいて
いかへ清見潟の方をハ紅の渚をして
うきとうけとさかまんとしておもらまねまや

とおひまて見とつ給ふ源氏御と
うちゑり給ふ方を何りしるや
私は弟ノ義なる新とうたんとは
我さから源氏のけとさしまんとの
源のさくらりなけとみんさしたかき
ねよやとハ車さうつされ
けまつありも　おほ物見車ささうる
て四つのひまうしありしや
さりめふさめ給し　秘　源氏なれなしみん

絵て月さあ給ひあるの　秘　葵上の
大殿のハしわられハ
源氏の人ハ下あおれまとみんお給て
けよくしくる給りしの
源氏の人く　秘　源の代までにくこれ
葵上れ車の代おとハ礼といふてさう
様くいよしけ見下の口あろくみんまさ
としきうれなる　源氏見れ物弟よりなま
物しみ夜下車をしやしれたてまう

と伝られ人まそて礼といひてあるとハ
神前のお迷ひあとにみゆへし拍手に
於て席うれしハ一段御身正しくた
しくおきすへきさ海よ書あるとなり
けとのみそしハのしるさに方社を祓を云て
似
きよの祭れ務あり　関東にありけり
弁
御身宗の源とハおのし源へとて源も
さしうきさ事とあり
武術は説に去りおくへけとふん

のうとゆまちておのされ祭まるた
ありけしみ洞のりはうり
九禅　忠せしとみそし川にもとみえき
神そうけすれぬまりしを
さあと川りいて
河
みそし河ハ神山よりながれ出て加茂社
貴布禰神社中ろとおなし小
河にて御手洗としうけもと全社のおよ
かかりし河とてみそし川とよあるあ

あり松尾社にてみたらし川とあり但
松尾ハ賀茂一社の神にあらねハ同説
りハ神の御まつりのと見えし也
はとこし篤盛なとあさ澄にみ道
川とよめり富士の井かり
流れこそあらし　男上と云ひしものたる流之
人のみなと　御息所清車のうちにて
乗そひたる女房たちとあらんし
あしあやまり　な同しあやまりにてき揃れ

又ともみたり屋りつかさもの之
拾遺（はらか不審）　俊頼か
みすくハみりしみ中しみえしを
めとあやまりけさいかりぬれ
はめもあた月もあやまき之あ篤れ
ちか井とよりその心かなくし
見えて侍しかハ　御息所れ空よりもの
え人しるくつかるへし
かくしまつまて　京流御跡代の

人く分まさゝひて指揮しらや
かんまめハ　左ハ装束うしお脱られ
ハゝいかり
ひもおの清ひけり　陣の事とよ?と庭
まうけ?を地お供奉ぬ人指揮しら
中ふも左ハ一かしおの中ふハ作?も
れ名おさみて目余ぬ人の出?
ともしをされらやうりとそり
大れの清りぬ組み?とは?ぬ?

車ハつねのすにゝあみすあかしきり筆
うものおりれわさうらをりふハ太をれ衣
人乃そうつうりまうまり
河 大ね行粧副ゝ時貞府官供奉
ハ例のやうや太をいふ人のなりハ衣人
太をお盟やつきてまられかくすを
せうしさく人あり　と清府を大将ハ
かく中せわハまけね盟ハせうわ曹ハさ
くりんせ六位ねね盟ま加らう時れ太を風

とよふかりかゝれ源氏とハかりそめ
の義也一身毎日ハいりかはなまに
源氏かり作なましうるうるり
花鳥ふてけんしは一の雑義也とこと
くりしく　註等に尽たりとも　うすに
ととく之てかきらるまするゝ千
弄
口傳云此物語の富言の様を仏へ已
源氏ゐおとかめんさめに為とさら
るゝくし
渾冏御流

関中此作ニ八稀のまする乃ととけ
まさ衣八甲乃や恵重れ深さうりに
かやれ車をくやまれ八去り指揮よ
くさるしうる車とたる人居し
む
此事第一の秘伝之　作抄ふてうり
まうれたりれ源氏とハ一身とも
先ろうや茶乃和盤将曹府生と一
人つうり御車ねうしてつまると以て
職ありて源氏と作けるハ限ありて

出納のこひよのつよめしをすかや其い
かう時よきさひて一人つゝめしおかれ
をとりれ頭方とりけるや仍今御所の大
おいつ下ハたハ左大ハ右丸書長一人を請
又人々とて六人の頭用とゆるされて
めし具せらるやうあるくよ御所へ参る時
そね塩ね曹府寺と又一人つゝ具せと
承と一貫うてうけるの頭方をもいろ
も清涼下の華や蔵人のうちとハ座上

の蔵人の御塩とはいふなと一貫より差を
為すハ例ひきき事やゝ御事附ハた
左を請ね塩ね曹ハ大津よ伝せする事
よてれとしの一貫よめしれよる事
かうねる事や此一臈の別当へうけ
事やおりうをしるすへし

似
左との蔵人のうちハ伴ゟ冊々子の伴
新蔵人の萩うとの兄弟や
松云まし此きよ此時のゆと思えて

川ふてあそひをしハされうみと
たり人ハつらしかしれうりそとも泳
きしけんぞ
さぬ清すいりんさい　たくをせうあまりぬれ
清涼月ゝりかしやうり出立らし
されハみな地下之殿上ゟ清涼殿出立かれ
のみに行粧ようりる物之
もてうしつりかたり　源のさ清之
本筆もうひぬハ

君子之徳風也小人之徳草也草上
尚之風必偃　論語
訓若風行　應如草靡　文選
ほかさうそく　秘　又松の女房とてあり
清少納言枕草子云ゝりかさきぬ流
かゝりおもしろく人のいときゝける
市女笠にさぬと中ゆひうとりせさ
本松白き袴にくゝりを入てうしろに
白きうちひらとさてそのうへにたひを

まつや女のひまろくやさしし
私云つくもハ百年ハかりおさなきまて也
と笑ふしひらとしよるさらの但同し
袖もめの市女笠とハつかさきを
以とこし
ましくあまりうしれ
私云世をもちてから尼かとれ抱みかハ
似合ぬ事とや　伊勢物語ニ哉
うみれあまもし人をとうかふ

めくみよこそ報まうしるかこ此事
かさよあましれ物見ならまつられ
とあるにや
私勘伊勢物語云
昔こゝろつきたる女ある人
にあひしかりてちらとなつかしきや
ゆうりけんかれ子共ニまうきを
女と男みゆみてやりせとうきれ
おほえし　足ハ秋文の物見給ふ

車にかくこきたてゝりきれハみさして
くり給ひけりとなん
りふハとりは　抄　老女尼なとの人物なり
出きりハよれつゝハみてき抱きされせ
りふハとりとみてらとしらり
閑中源氏世にすくれたるさ徳をしるを
きりハとりそとや源氏をとこく
しくかさて以つかり
くちうちすけし　老女なとの口すゆり

こよりやすかりし之
かみさこあさり　秘　先も不けれ横乱れ　閑月
まとはくりひさいはあてて
大鏡云一条院春日乃行幸に御輿に
奉　東三条院　誰子そひの也給ひしゐ
うりの世界の民百姓まて神仏の御にとに
額にて合てをかみまゐらせ
む　宋朝にて司馬相如といひし君子の除
小入し時ハこれしとゆるうちたうてを額に

其ハ宋朝通鑑一見ノ花鳥訛ヘ

くはしくは事通鑑といふ書に
みえたり

秘

花鳥に司馬温公とはたゞひれふして
書かれしを司馬相如とよめる
温公か事や相如ハ漢の代の人也公ノ字
を如の字にあやまりけるにや通鑑を
宋朝通鑑ともいふ千司馬温國衛士
以年加顥四卅司馬相云せし

弄

花鳥に司馬温公の事を引り其代に

及てしさりれ　同年同

ところしけるか　西村嗚呼せよとてハ
心うくおもしらぬ世れさかあり
をのかれかん世　袖とられて
源氏をみんとそまうけるか心に入りけれハ
さあらにありかめかり
ころさるへ　押人にかよりてもあかり
見い遣源まいらせ　源氏心にてかろうほし
さかとれ人々とをせとはとハ宮成

のけふもふくまりよりぬく弟まま
もえれの中ふて、ふありともてらり
花ぞかり　秘　清少ひしうらり
よう只まハ源ふと思ふんと
のとさ成ともうひ　童文よりぬ人
れさまらりわすと申ふのましく
人のめふさり中にといと
ましてきかし古まうちりのひ
源の内侍ふうまりさかりの人さと

かくみけさうすりそましてれ初なて
思ひうひひ行ふかのの人うとハ争う
りなうさき源氏清さゐとりんく
りれすうぬとなりひ吉うあち
きうし乎人ありしと之
式部の丞さし汎まで　秘 桃園せ　弄
花 おさうか汎姫君の文ぞせ　桐壺内の侍才
いと深く中きまて　源のさゐと桃園
の宮ふせ　權れ東流文せ

詠るとハあまたある歌人と
秘 源をとりてハ歌也 歌業に加へり
弘徽殿の詞ハ○にみな歌さ
ゆきの歌や心あひかなり
姫君を　　あさみかれ姫君也
うしなひきさてわかり給ひしへ
秘 権れひめ君の心中之源の年来に
きさて給ふ姫君の源心ふと海りまう
かうへし源のありさ海れめてさき

いかにしもいひても猶てん給ふとらん
給てるのめならん人なりとも加へり
り給ふ人はなるにハうつひきなりぬへき
ことなりと申して源よりし以後
されとけちえしとハおもふさぬハ権れ
負ひなりしせ　　聞ノ義同し
わかき人しハきこえきまて
関中はあさかれひめ君ハ祭とらん
給りぬる但人のへ殺し

私云このころ人しるしつゝさ波く
今の人さへ祢といひ姫君さゝき
まて祭を清らみけるとみゆり

祭れ日ハ　卯月中の酉日之

私曰賀茂祭ハ卯月よ酉あり中
の申日ありハ当年しふまは
欽明天皇の御宇四月よ吉日を
えらひてまつりはしめられけり
またし和銅小記ありて山城國司是を

撿察をともみまつりけ國家ハかもれ
ぬ本祭なりへきや酉れ日の祭さ云
所より使をさされて走馬を
あらうあひりへきや開白頒
茂緒も同日之し

中れ酉日の祭さ未の日は左傳り
まて六府をめして都國司をしろ
に當日れ使ハ東れ中すわつかむ着
裳のつ帯約りしらりふ人て袋杖

の薄をとろやかに松尾の社司まて
の日より始へき所しへまり欽明乃
御宇より此祭ははしまり下加茂は
祖上加茂は別雷二の神の子也と云々
已上公事根源抄
私賀茂太神は山城国の地主にて
おはしませは中の中日は国よりまつ
る也中酉日は内裏より此祭あり
前物見よおほくけるは中酉日の

祭也此物語よりけりしは此祭也
葵りは物見行事 秘 葵上也祭を
は人物見さきと
かれ御車の所あらそひ 秘 源よくは
く人残るや
あふひおりたれはすみ人の
弄 九月の家風とれ殿へり
秘 葵上きれ車や心をおとりてか
やしまはおり御きしやさましも御日祭

はあらくハちゝくともうまれし世に不
きりとさて小凡てもちさうひてう祇
のことも出来ぬるしや
関半をとくしきりまて申り
おかやうすり世に不為れすハてくり
とうり源の心く
みやまあハ心るせれ
みやまあた何の小さきうあれ
あり人ともや葵上てされやまうきにせ

なかしうんしに常人
媼（はゝ）老子　伊勢物語にあてうる女れ
在まぬて在件とを思ひ出て
源氏て後へり源の文をあ之おハすり
うりかの口おしく思ひ後へきんを
なしさめんとと
斎宮れまこりとれ文よ
本の文とハ下定而も六条家をあ
れをあくさう本ぬくかりとハ神すれく

かりねなるらむ

花
延喜式云凡天皇即位者定伊勢太神
宮斎王仍簡内親王未嫁者充之若無内
親王者依世次簡定女王卜之　訖即差遣勅使於
彼家告示事由神祇官祐上一人率
僚卜随勅使共向卜之解除神部
以木綿着賢木立殿四面及内外門
今案秋好中宮ハ去年卜定ありて
いまゝて諸司へ入給はさりけるのみやま

淋しくて神訣し給ふといふなり
此本にたくりとハたかれをいふなり
秘
卜定ありて大内のつかさへ入給ふ
へきをさりつるにあつてまうけれ
六条京極の家におハしますとや　異本
河
榊とハ異本にも坂樹とも日本
紀にかけり　天照太神あまの岩戸を
さし給ひし時八百万神達天香具山
の坂樹を根こしにして祈給ひけり

殊の外まとまず掛を能本字本頭へ
字し龍眼ありしき
さる本なりけり
（秘）独すとて對面うまさせ
私に為すくもと何れハ清範書よ
かのたいめんありて源氏と
まへるを
さりけと　源氏定基なとなり
とハ新中なるなり

さみようくしくて
（秘）ここに對面うまさといへり源の位と
うくしさハ物の側（リハタリ）やかなるを
おもてにくらくこれハあるまじく為之
うむさくまゝ物とするにや
清やかなしはべ　源のつやなり
是ハ二条院よ　（秘）源氏をきつりとなりけむ
ハやんあるく
みれたいま　紫はおハすなるけり

ものとにかんよ　書れとく源し日

事ーしてらるへしとあり

そーうそき語いさあると

女の暦れ事之みおゐひんそす

いー以小あ夜のりあるまきえ子ある百

ひろうきいろひてそく被詞あり

としこは箋いそ

さよみれそろせ　河　暦博士

日　推古天皇十二年歳次甲子正月

戊午朔始用日

私陰陽道とし　天文博士暦博士

あり

まり女房いて録とそ

私はふハ源もと女車まていそ語

へこさしとあり

私云これハ書れすの女房たちと

めかて出るうまと任らんもろさ海あり

らうるけるかみゐりれ　たかみゐとれ

よこさ蒲れきりハ良れ字なるも
ひきりんのうへれらうさし
は 浮線綾の表袴わきハの袴之 若
輩ましいてあり
む 西宮云女初ハ紺地總角ニ汗衫半
臂下襲表袴玉帯ホ又新宮東
院童女總角青麹塵汗衫半臂
下襲袴白柳帯 今東童女も
晴の時ハ打袴の上ニ表袴ときう浮

文ハ菓霰やうのもよハ表袴とハされ
弄 打袴トハ板ひきの袴之一動ニ上
秘 童女れうりはふ時袴とよすり
よし花にみさり
かけり経帯さゆるま
忘れきこそうしまらろき髪なり
そへあひうくし
あのゆくしハまれりくよて
昔れを法のうきゆや

か細ちあるかな
源氏かけまくもて
ものしるふうちう
はしくらずし

こゝろせよとあるは
おほかたにて髪はおほく長させ
いとうつくしくも
生ひ先は海松ていふ髪はおほくさ
人にかへりてはまれなるやうなりし
おさけうつりん　おまりにもしくしなき
ちひろと　髪のうつくしの説則九尋之
注 そのかはにのみみるふさの生ひ先の説のそへん
何 かしこきの異見に海松と用之

九禅　碁盤上に　山菅　山梅　海松
青目石二置てや
是より髪にハサミをあてさし此説為
秘 注 説言の説さし伺之
む うへは十一云かみはそぎさ年
くわうとつりつまうる根之
委曰 よみもいそかしん定めきみちは恭めけぬ
む 源氏の君は千尋ともいはひ給ひつきて定
うきしかにとみちひかしかへて

千鳥のうみとて定家卿詠なり

秘

いつしかみてきゆんなりけり

みちびきまいとハ佛の仏法定まる事を

よめり是やうしおもふひかりの仏の寿

抑ふかきつ有て　むしさ沙のさめかり

佛のめでたさしと見給ふや

きよし耶もうくさうらよなり

秘

今日も抑人車おかきうらく禅比日

もおかうりしあまりよりもいふなり

秘

一条や

むまれたとしのかたふ

は　たえをる備宿度くこしたえとる通ハ一条

西洞院大とうる通ハ一条大宮や

な　おもハし成屋とて大内の御よりの

あまれ諸府の御中おみの是友まろ

取や加く民みに大内の時々北の陣々て

一条をひかしへまかりまかりてたえを

のし成の様をわかりかり

源曲、侍や

よろしき女車の

ちてやいらせ給ひぬ
ちてまうせに清車をとめしぬるこそ
られよ雨さりきこえんと源内侍れ
人して申させけるや
いかなりときゝ給へん　車は内侍なれは
源氏いまはかは内侍と返給はぬや
ゆそて見給へる　秘 源の氏蒼や
給ふさに　いそらさ雨をと見給へる
とらやむかへり

扇のつまを折りて　は 檜扇之
秘 檜扇のいとかうはしきをとりて
源典侍 はかなしや人のかさせる葵ゆゑ神のしるしのけふを待ける
秘 葵をみて　いみしあなり人よはあまた人によ
めり神のゆるしとゆけふとはかなの葉ふ
れをりとも物しつるよ人を日
車しはふ中くにかひなしとと
松に人のあひ奈給へかと人のか
させもしはいみかりし

志賀のうらふかと　は古今の詞可珍
宗　しめかさしは車あれハ須達の
うらもあらしきこゆ
私　川のいまさらしれや秘事なる
かゝるなりけり
兼　川のまもる人可珍　関守人のあり
なれもさへてくるまかへし
九禅
兼　本抄してしてまと志賀のなちはちるぬ

もみちを大京の山　此歌名所なり
周防の内侍の歌　源氏物語けると
同時ふられし見出すへきてや
続拾遺集や
此歌志賀のうらとハあれとも名寄
時代もいふ
川うらこそもなきあふれ志賀の
とハ今の名寄付てとらなき沙汰
ゆきしを読きれし人の歌をこう

源氏見られハ四人ともかいつきと云様よ
や但此歌も内親よりうちハよろりに哉
はねむ源氏をあれハむすしうと
いふりハ此へともけんし拙詞ほゆ
此歌かりともあり
私云此義未落在三本よ注し繼れ
先かきの世かりは川か文を用か
よし川あかりてもんてあらと
いつ義拙ろし

かのなにかしのまちけ　源典侍やまと源
此みしまきあかり
いまめく　は今めくいよみてをかり閉之
かましけりしそあさにねむちかやそちうてあさ
八十氏とハ人の姓のあるきかく注八十
限へかす百姓をもいふ八ハ和訓の数のお
ほきなく八十ゆゑ八百日ゆゑもいふ
皆多くなるや八ハ数の限也
秘
源氏一家かさしハもく中をさや八千

氏人とハ数くの人のあひさやまれし
為物とかやし此語るアフイトよむへ
しみ逢日とハよむへきれハ古
今物名ニ葵とかくしてあふ日れ
まれりとかくしてあると葵とを
りこめてよむ時逢日とハ物名ニ
よみぬる由なきさかり
後撰第四賀茂祭日物見侍ける女車
にかきていひ入て侍けるゆきかへる八

十氏人の玉かつらかけてそたの
むあふひてふ名を
中ニすまさうけてもいふあはれ人の
あふひてふ名ハみゆきさに返　弁乃
別するらし男とし
秘　源のちとふて定家之
ちりしと
梅くしかなしけれ男名とて人のあるか帝のひと
あふひハ人のあかり吾ある名のか一
秘　源内侍ゆうまかや　弁内侍大夫かあかや

源とかく人々なあり
人とあひのりて　源と云てや
だ
栄花物語浮正宮和泉式部とひとつ
車にて祭見給ふ物すたれの簾を
おろして紫の紙の物忌と付たり
今案栄花にいへるハおほれならしとハ
あけくるゝ下すれしハ車の中に
几帳の帷とゝるよりてゝ
ゝさるや

河ニハ大鏡云帥宮和泉式部にて
祭てんのゝさ見給しあり　源門侍従のみ
心屋よりおはしまし人
うらゝすかくたまふ人おはしましつり
一日の流ありさ海のうらハしれり
源の流さ海や　頭日の車や
枕
されハ物見の人の四丈なし源内侍
りハあらず
私枕草子云此ハ車ひとつに源さ

のりてこれひのおほきさぬきおり
いりきぬうとこくれてとられと
こきおりしおもりおりきまてみせ
きんきれ融流のこゝろふかくそひの
きうそくらりりうしてかふひ
とまつきうしくのわさま
これあんのまうすよ人
ちとこれとし人のしらねや
いはしりぬきさし河のそひられと

秘
河　不挑也
源氏物也　閑中なるまゝぬ人を
あつみつえすとおほしけるか
弁
此時脩卿物えうし心をつくし
源内侍はおもうきさんりさうぬ人
もりさびのかのよまきかねてと
をしりしかぬかよや
私云いとましりぬかさしたりひを
ハ源内侍のまけれ人のあさせちまい

ゆくらく何にたとへむかたはいひつまれて
源典侍ハ源内侍のすけなるへし
そうかさや又ことのりそひ源内
侍といへる人を思ひて書ま
いつれとそれハゆるさき世ふ源
たいせなハかさしとなにそへにそ
おうさぬうりそれとはとまりぬ
えし何うひもハいつ事お
かゆあす

かけまいともなかぬ人ゝ人あひの事
給へりまてまれて
秘
源の尼や源内侍となうさき人世称
れ人なりすハ今源の人と同車し給
とまりとうらうゆかれすもあるま
しきやいと源しうすとハおほせ
と見しまさ奥ありまし
関守源まれてせし人ともあひ給
へりまつみもせぬ源しゆきといふ

きこゆれ
私云おもふ所ハ今ハ源内侍か
西つれなき人といふへくあひのまゝ
ハ其も源もやはきれても源氏
心へうかきこきれいりくきこゆるまゝく
こきまんもハ又なよみけるう
るゝや西く中もし又源の内侍の
此一段れ心源のなるとし給へハ
なりてつるまき人まて源内侍の事

なさよみならせさて又きこゆとあひ
きこひ給ひいよしなふかと中か
ハさん抄うとむろしく又其れ
心をしきれつてまれ給て本意
竹ハぬとし義々抄にさ給ふく心を
付へしきつまて参れ五をとうけま

清見寺ハ地とたかしみえて
(秘) 是より京そうの文をかはしとそり
こし比なりし　源のうしくしくなり
頼ふへかり流禅の日の車なれ
ひのすゝみてつなり
清見かさまなひにて頼へと　源と
つきのまるえつなり
ふりさけてまうし　伊せへの事
立とあふく (秘) 世ようきさいともおなり

なきひとすと 何よハ おもひ下をやと
アリ思ひ抄スモとのさえし
清見寺の何ともけられしや
(何) 伴物の海よりすゝ源のなけれしや
心ひとりと定めつつ
(ウケ) 浪子きれハ詞書の後に抄をとつ等
これハ計をしつみもそすて
莫のくひやまくまるや
(む) 流見寺伴せへくなりや書よりとも四迄

はふまてりすの重ねをうけれやと
うけかよりありてはりなをうら
りとりとこひ定はりぬやれかをし
うさたりやりてありも悔しぬり
まれ風りうそくし又下に詞ま定か
ねさうれあろとありられ一首に分
りうはり詞也　弁川分
秘
字ねうり川分や　伊勢人下句すゝ心
りもつまさとあるかはふよりうや

そうもはりんとと　いせ人りはりん
うすと源八きうてそうよはりぬ之
ねうすぬ弟と　秘　源より此詞也流下と六
さ海さ奉もして　さらしみうす
行つ孫うり
ひとひとひうまさもても　そもも源と此乃
しのひとひのすハありうある
すうれハもと　秘　おの川分此詞
定ちはりうり

みそぎ河のあつかりし瀬に
だ
車あらそひの日の事也
何
万葉にハ禊をとうけとよみて
これハみそき川とよみけり思しく
大嘗にハ御禊の事あまさて　葵や
御ありきるし　源の流れもの也
さいへいとやんことなきさきハ
秘
平生葵へ詣人はうすさりし　源も
心ことハよく思ひ分て給へく

英ノ外ニ点アリ

関白二条院みてとは以ハ葉に御判
之御方ハきさくあり二条院ふさくと云
かり花ノ義略之
めてしき事也之　秘 葵懐如之
わかれさまて　源の方やれ在氏亭
まても源のおそし海すさおに
あなくし
御の事いきすな海　関白ハ事するま
仲キスタ一　めはれ

河
遊仙窟云　窮鬼故調人（イキスタヒコトニナヤマス）
注云　䰟与鬼通といふなり
弄
九禅　生霊廿八云　又只ハ霊なるをい
或抄に侍説よ人の䰟の遊よそもし
てきるりといふなり

人みな御ふくろす　是ハ文字也
生霊之より御みちのあら之人
ハいかてかうつりひさハなさけある
き事之御文やふみそき川のは
らかりしかりかう悪果とそあり
なつかり
あんざいさて　験者之
けかうひすゝてうしろて　源氏の太将
或とて大夏きみ流いつまゝあくし

いひあつかふかり
文字方二条后　秘 生れおきうきかと
人ハ志らてうきふかく妙く　弄月
ねるとの世　うゝるひるとのれ給ひて
と見ゆけるかめのと　秘 自然葵上の御め給と
のうちまうしみありて先立さう
うしの霊りやうまいかく
おやの御かうし　又大臣さまにてかり
さう邪気なるしはいてさかぬめし

いのれてハ出拠く
ましくかぬかり　拙しかぬなり
さしてもうきをいふなり
たつくし社のこと
秘
地の字の称之　弁同
葵の称之　地の字の志とさや
院よりし　弁秘　桐壷帝や
おしきるり人の御かた　葵の事なり
まつひ給まて盛坊のこゆ

うらいよしおしき命なり
家と称されさしきれ　葵とおもひと
家と称のこえていよし祢にむその
いてくるなり
秘
霊まるるか心みえさり
乱敵ふハさ給ても　秘　人のうらむへき称
とろりみるかハおしき事や　弁同
想して桂つの方よりハ不肯称之恨
あかとハ志へるる拠くかへりの称ぬと

給へしとや
うち抱あひのうれしさに
（何）大神宮ハ佛事をいむゆへに
て修法をおこなふ之 秘伝
（を）むかしハ文覚上人をもまいらせたに
それよりの文ハさうあれ侍ておハしハ
かくまいりて清行まうしつる
おもひおこして やうく思ひ立給ふ
文覚上人倒すまぬと源の兵衛佐殿
まいらせぬなもの 文覚は源のよりとも
うけりて修法させ奉りて云ふ菜
京極の摂家ハ秋好の神ぶなそ
わたせ給へハおほく源氏おもひし附
も柳の心かけよろしきて気を
うそ對面し給ふぬらしいかり
はみゆるされぬへく 源のよりとも
さうえのうしみをしかくれし給ひと伺
とはくしのまくうさ海く

なき親の　おもひの春の涙の
すゝらひもしのふや
これらはさしも　涙の羽之我たさか
とたとは母も父母れおもと拂はひ
なし給へ六家主不をみて早う
り涙の宣ふ候へ　見えもさえて
うん句をきりてまろ給へし
たかしのかめり　豈これかたととく
いおんとも根給ぬやうりと

家主不へまうひ給へ
まちし心なまけかり
足より家主不の母とは涙の使へ
うちけぬあさかりけ
家主不より出給朝之　秘月
関書涙と家主不その様なり
松之股ゐりさ母へうらもけぬとは
羽をてぬやうれ他れきれし手よ
さらみて打しまぬあなたを中く

立帰り給ふなるへし
おりくれの人事ハ　秘 文章丸心
せんとうさかさり　秘 葵丸懐妊の
すへ　文章家の御事なり
かやうにまちきこえ　はかりしさま
うらやましけなり
文なりそ　秘 源とまちの人ハかり
おもひそ源の御くをねかり
日比まうしとこうさ波

秘 源のみの詞之　葵丸おもかけ之
礼いのとつき　秘 ありのここつ御事也
思ひ源なり
天文まで
神めくし言ても行ハまりならまる男子丸なり給ひき
む
言ハ泥をひらしいはつきさう源
さて神めくしていり男子と成りき
人なりま南うしよりて源中よりさ
川ゆよ文章丸我力をたて源
北斉よにるをしこさ笑えあり

秘
此物語第一のかとこし然れとも我
身ゆれを思ひよせたり
山の井のことわりにより
文字のみ詞たり
河 あしく我そそてきたるあさきハ
袖のしめりて山の井の水
を 山の井の水ハあさき契のたとへ
源氏清然してあさき契ハたとへりく
と文字の迷懐しまく

秘 然るに優き浅り之 図半面之辺
流手そ教さくられ人の中に
六文字の秘になり
秘 いつまでもちかくこさくしたり
いまそやあるせる 弁 源氏然之有感之
かなまいつもあひたる人の御杵
このむくさ下れうさんてよくこそ
りを中うるよたり
私云源の心をまとろも然ども

小馬へこしのらて思ひ出へこすか
ここちもしれと思へハみたまひ
こころありとハまそやもけり世
しれと何ともなく人のこのよまゐく
ぬと歎しめへ袖なきへし

袖のしめりやいはまふてらぬ涙すになん
秘
山の井のみりとあれハ袖のしめりみ
泪とよめり清見寺の分あてうて
ぬるる泪ありけれはこそそハ伊勢

抄にはめにかきとありあつきてよ
ぬれてるともみえてゆへ
こきまかり

私云袖のしめりやいはまよ経て
身をこりて見るへしさてあらぬ
とハ示涙徳への涙はしあらぬ
有之と云ぬとハ世にいひのより

題
淺しみや人ハとかり我をハ見もそありや御本云
秘
贈答哥にしくみもるあり花の院

む

いろふかき川ハ雲深く深きこゝろなり
早苗とる男子ハ泥中ふかきにおりた
ちて身もひたりまてハ山田のこ
つとめ／＼しけまなかりし也身を
ひたりけれこひちしけみ也
いはつゝひとくひたて之也
関守ふかきよハ袖ぬるゝとある哉ハ
袖ひちハふかき身もぬるゝとされし
ハ関みて浅らぬかあるんとハ也

山田のそほつはしいつら哉ふかきをきれ
伊勢物語云
つれ／＼のなかめにまさる涙川袖のみ
ひちてあふよしもなし　解抄綱下
返し女にかはりて業平のよめる歌
あさみこそ袖をひつらめなみた川
身さへなかるときかはたのまん

け　蛍花の色

け　浄かへりとうつろはさてこそしきせぬなり

秘

源氏をすの詞くちに乗すハ已と

まてまゐへきとさしつきさりて

あふひの上の一つ月ひまなく

ハまいりかりあるへしとなり

弁

こりつまてをすのとゆきぬす

とをこりれ詞くたかろけるす

ぬきりさいれおりしうれハと

大殿りハ御ろの事いふうなり

葵のつゆまつひ殿の文まて源の

たゞせぬくまて家もまたハ物たりふは

源氏おくせ也ハいよゝあふひのえ

のきろうしうひくへきなり

はれいきもこ海ちておもくれはらふうをと

はれいきもこ海とハ家も河の御家れ

又文もまれ文のたれの是れるとうくか

河

大殿の文たれれ

ひいふなり

む

家も又れ文たれれれ是といふなり

秘
河海におやまはり　花鳥　流一説に浦の名
所れとひよひれして又在所の名に
よりまはるゝ
こし路につゞきておほしつらんは
秘
さりやしおほすましおほえ文を本
此句のさしと申侍て云つ
けるよ心中なり
身ひとつのうきさうけさ
秘
文を本にうけさかり

秘
光より面を本に伴ひとゝさたなり
我身のうへとのしうけたまへと通
みとハれもいまてなり
地ならひにかゝるに井を
かりしもうけぬと　心えてなり
あまりなり　車の前あしと進
根かくとわされしさきのその
れしつまりねなり
まうし打まもろく行ふ　おもはやて

たゞしるしまでもありといふ事ハ
きまりぬ事なり
秘 文章にもとろし深ふ付ハ色み
蓼と見之深くも之妖異ハ蒙なり
けくいふさ 河 経章 ひさかたの光ハ
ひろやふりといふより名付たり
秘 いふしきや文章ハ蒼天如此
私 祇仙宮なり号汎与鬼通之とい
ふ名高かりおこなり

花月をすてゝや 弄 秘 花月の句なり
河 月を捨ていりまふ人我なり
おろかなるものハ心なりきはま
うつりなんす 我月の花の散ぬるを
いひなしてきたなり 我之かくなし
せハ人のいはへとハりとあふさえ
いとふしさら 也 なれまる他さきあり
秘 花の名なりけり
ひさすら世をふるて 秘 死霊を常に得る

ところなり
まてつれなき人よ　秘　源之
かゝる事のおこりはさもしく源
よりされはつまらけしと思之
なりとも批まうり　弄　秘　同川玄之
ほ　なしうしとおもふしも批と思之といはし
とたまふりしやるみ
む　面白く弄り乞まて文とそれ侍り
秋文はさそうらへ入事よへりしと

ほ　うら文よしとは斎宮に入事也
九月は斎文れ祭月之
延喜式云凡斎王将入太神宮之時月
む　九月一日より廿日とし
大内のうらふたおへのつきに入
秘　給へきといふなり
いまいりもの文よ侍りますなり
弄　斎宮に入給ひし事也　秘同
この秋より給　是は斎宮之入給事也

の家ようつゝひ　詠月北家へ
うつりかふへきもの
二ふひのはりとく
む
法家詠月よ入語人とてしん北家
よ入語人とても東川まて御襖也す
ありまれと二ふひのはりとくとよふあり
但暑のけれ御襖を西川まてあり
るへく　秘　花よみてふり　寿月
かけじしうて　御息所乃之庵ノ定

ダイジ
家之いみさたす　秋好乃家人之法家
乃月の人ゆるしをれハ非道の行ある
家へ｜
晦さうされいたり　秘　葵よあり
深れは所さしれありき葵上姪とき
つひもとりしおかすれハはさらめさ
のとむかうの御り心れうこはりとうき
社のよつてひよハ制とゆそれりとく
まさはりへきかと

秘
葵は斎の事之
まいのしう祢さ
文を取に見るへし
いみうてうせられて
頭志はおの事の羽伏せられけれ
ゆうへ語へや　おのけれいゆうや葵上
の語なり
大将はきこゆへき
秘
葵の上は源はおの語りんとせ

されはよおりやうらん
頭志しに引せられてりのあれ
みへきすおりるやうと侍みえ
れさてまわりきり
源はおよひのうちえおりしうえ
むけふくりれ　葵の祢
きたえたうしりしきさ
秘
葵上は書遺としうしおえきうしみえ
たしし文し　葵の父太政と母文え

經ハ地宮に奉納られし八月拾五日より志
見せさせ給ふなり
から僧をもあつめて法華經をよみ
ゆへ經へをおもしかすかねと出て
法花を讀
け
法華經敏達天皇二六年渡來胡し
羅什三藏釋し　源氏葵上と源
見さてまゐらせ八
乘ものさま　化人なりとさのさ波

いはけなくしましてけんしな心
件ことなり
しろきはなりま　秘　産婦は生るなり
うちへいるも　髪をゆひて清
せいふうへいるや
かくてまらむさけま　あやひの上れ
かくらとけへるあり海とハは
しめて見へ給へ
清みをとゝへて　葵の上と源氏との

うれ紋ハ　源氏
まいハほとわつりしくそつしきつり
りのあれうひさう有ふ葵れ子の
ましあしにかゝりさう称く
かみされあわりてさ歟
秘 葵上事霊れかりかゝりて源と打
倚まりうみさとおすゝ　并門
見あふハ　このあふひれさ歟と源れ
こ給ふん件ニ云ゆるへし

おまりいなりうさき給ハ　秘 葵上れかり
いかうしきおや云　秘 源の紋く
かて見人給ま　秘 源をとら給まつまてかり
何すもいとゆう　秘 源れ詞　けゝしも
たハせしとハおりもおうてし給
りんもつしきあ給詞之是ハ葵れ安
紅まてくうゆくうんすとゆうし
云給と源れありしての給く
なすゝすあらせ　花 秘 仔世そてせ支婦

のたハ殺ましきよもり
私云いかりをもしとハおりまくらハ
おかしと何かきれハとりもとし
語り人とく見いかりをしハみなひ
いかくろうかりあふてしちきり
ハゐしといふや
たゞ文字もふつき注り
秘 釈子の奥を一世といひかけられ
こゝにハうきあての縁 寿同

いてあすや 秘 葵上の詞文字下の
霊の入日かりていふく源の君の語
ことさかの本まてハうしいふ
月れうえのいとくるしおと
源く霊のいくすか詞
かくきいりえもおふ文字下の
年をかけ下まをこしね清遠
き詞とまや
物ぶふ人の歌しなハ

七

物思へハさハのほたるもわか身よりあく
かれいつる玉かとそみる　和泉式部
此哥ハ後拾遺ニ男ニわすられ
て侍りける比きふねにまいりてみた
らし川にほたるのとひ侍りけるを見て
讀侍りし　おく山にたきりておち
つる滝つせの玉ちるはかり物な思ひそ
此哥ハ貴布禰の明神の返しなり
男にわすられて和泉式部か年ころきこえ

けるとそいひつたへたることし
かなしけに　ものけの深りきたる
りしきよいふなるへり
歎佗空にみちし我玉と思ひてあくかるゝ
うけきわひあまりし玉のあつまん
衆ふくみは玉むすひとゝめよ
やそく川ぬしハたれともしらねとも
結ひとゝめつしたかひのつま
はの字ハ古今大江氏の誦文の本て

玉のおのこをむまひとむすめあれは
かりみひとめよとかたりけれと
なりまくしはくとそ侍るや
その人にもあらす　つまれ葵のさ陀まには
あらす中にて文正のさはなたり
と源のなけしあつかり
あさはしき人のまく　文正か北の
のまへいてはつかしき人のけふと
いかなりてさいはひあまりましけれ侍

猶まかせにふくかふへくもあらぬことの
さましく源氏たにもちかたり
かくれたくと　源のまたとうしたまはす
て宮にまいりかたり
むまそれかたり　はなきを正妃にならた之
人くちなきいるし　人のみえさる人や
源のくらかり猶く
傍あつもさかまり　葵のおなしき宮に
中宮うれしき文なれかなし御しらさく

ひよしたハすゑまや　御庵風を仰く
御神をてよせ
桜花相頼ニ一条院の御母東宮殿
ニわれ行方事といふまいら哉
しいせ給ひてはゆ御神とに
きこしめされとおほ御神ハおほ御
此事ある人ー
雑るてむまれ給ぬ　秘 夕霧の誕生之
人なりあつ　人は君と祈あつ

あかくこのひよしふまれたるかたと扱の
宮ある此むまれんとく
のち此事　秘 産いれの事なへ一弁
たいかよこうり　立帰るを此ちかしに
ねのすも平安まうりうるせ
山のざに
義真和尚天長元年二月始
補天台座主号修禅大師
さりあれしおほかす　婆しきやおほ哉

なにしとさ人へしせなるへく
まりけりありめてしき
延生の奥ありめてしさ給人へ心
といれ給ふへし此ふさりハ源氏傳
ためよハさしめて伸子せ給ふ子
られハめてしく一のと奥かり
つきのふるへし
られ人ゆかり　延生め事にれ乱し
て夢れるにちとゆくのあるり

院をはしめ　桐つ帝ゆ下れふやし
らひあるへし　接ウフヤシナ　丸傳第二
ふやらひ夜をに
三ヶ夜五ヶ夜七ヶ夜るまつりや　秘曰
礼記内則篇云国君世子生告于
君接以大牢　注接讀ヲ為捷
為捷々勝也謂食其母使補虚
強気也
又左傳桓公六年傳云九月丁卯

子曰生以太子生ヲ礼挙ヲ接ハ太
牢
関婦人産後ノ空虚ヲ補フ心ナリ
男まそさへおハしまさハ、秘 さてこそ男に
てとゝさうの筆法ちらいて
面白しとし
かのこやとあかうの御ほり柄と
葵うさ此事を文臣の旨施し
たいうかましいなと

秘
なにとこきれうてあすけハはちさうて
ぬいさゝまうぬ意せうつさ　侍ノ字之
はなゝとし日翻し
らたわりもそり　葵さにハ証きたに
つきて沖汐のやあり
文臣不ハ葵此たいうまて志もも
果うりとて流をりしめまてや
指ところていよく　稲さゝ思風也
きゅりみ此おりのつひまたる事此文出来

けりけるよし
関白卿氏のきこしめすとて葵
のまへよりから御人ハ対面あるまじき病
中られハ御方へ光葵の車へ之
もそうしつききさて給 なりと御
のまてかしつきさ給ふそれ
とあひさり　秘　ただ大臣威勢ある上臈と
むこふよりなのみさへ出来ぬるよは
もおこしうると車あひらうといなり

葬
ただ大臣よりの事たらひさうけふ
られハ盛と欽理まて葵上の玉事
出来さらや此物語ハいつもこの心
あるへし
まことの御四ら　葵せ
さハうつしうりし　秘　大事の霊
氣又死うとの名あられハお平念
ろきさしや此所ちとゆへの也
しるさみの御海之の

秘　夕霧の冷泉へ御うつりませ
まり出しゝ　此より此書文冷泉より
御のかくりまり出しくてまりけ
へうつるへし但此書の詞よ流るとハ
まりていとやう御そうゝんとけり
これハ書文の事と思ひすてよ
つ箱て先祖つ不の中書とまし
ゆうか猶ときこえけり
うらとみて河まりそうしう

是ハ源氏流河ちとくさいり流んとて
あふひのうへおりて家よ詞之
うぬさら　秘　東河あらき
ろうくありさ流猶水よくの流り
けまさひくよえんあゝ河のくさにあも
河ゝぬといふうをとうく流りとひかう
拙うしまてうともあへきゝいとてよ流う
ありう
此集毛とまて滅ちう河の入ちう八

是本之書表紙にハ此図あり
是ハ葵のかつらまきたる女人の図
ゑんじのしあつへきかけハつからひさ
れさ候かりと見て源氏中におもす
とらしく葵ハ病中に候を悩ミ心あり
入て枕ならときさえ源も
源氏丁の内へのふたりよりかけるハ
秘
葵のさ候なり
葵ニ對面あるなり

されともむけになき人と
よいけるさ候なりかつてぬを候
侍りけるも多きもし此ゑ
何
邪氣を払ひ薄荷小蒔子をは
秘
事あり其香邪氣をさるとし
藿摩の茶子の香りを第一麝香よ
こ候くてそろしきまうるへし
侍りけるまいり
秘
髪あらぬ事せ寿
何
髪あらふ事せしし武士体活かれ

史記ニ沐ノ字ヲゆするとよめり
私云沐ハ髪あらふ浴ハゆあみて
いさぎよき心なりし　秘　浴清是正義心之
私云心なりしとハかやうのわさなる
云ふしるくにハよしなきことひ心
けれよしといふぬるにありやなかれ
うちある思ぞ物のまよひ給ふ
さ候のこゝろあり候之
とりなせり　愛此より哭此へなりて

いひし事ともや
かくおほけれと　家を立くしく云音
とゝうとやうみれそれんと思ふ源
の心なりしそく
けちりて　封南うと何乃人ハ何ゆゑ人
うらてあるくされ物のまに出離時
此事源の心よりとしきもらし
人此清ためハとおしう　秘　源氏之事
私云出家と源氏たちて文章家ハ無常なり

ハ物の事ハ事一定と人の思ひける
へき事と人の得ぬいとよしく
源氏おほすなり
又私云人の得ぬいとおしくとハた
めんなそてきても物の事よ何かれ源
事よろしくのちらまた源人ハ是を
天氏は女めいと打しき事かれハ何
ららおりせれて文ハりとさそし
つり源つふや文大すき姫上に頼

為と而えよ赤り源氏かれハ源氏行
からたいせん公ま是而給ぬけた近
ミとしふろ人しはたまきとり私
の全きやうとはふさるを維さる
為へきれいて

いたりつひ源しへの名お
け源氏の去とハさいろかり源へ
多とつひの名おあれハ大后母名
もいましく源氏ろさけふられハ源氏

いにしへもありきし給ひたとこそ
なやましけるのこゝろへはまいのさ候までも
いこもあそう　葵上方事よ候りし
時節の事は今に至て織に源に知る
ところの給ひし時の事とさ候よ
たかしたるべし
侍さいところゆけよ
源のゆたきるもおぼえれはいはまに
物出らしきこしらえ

御ゆるしいまうすとも　秘　源の給ふへかる
此事はいはれうひ給ふと人くの
たりふとこそ
いとをしけるか　これらは葵の病
中のさ候をいふ　秘　かうしけるしく
うち御らんし給
人ましと源は梅やうなうふこと
もうさき人とや
関寺かくれおもりめし源のなまひの

そひらく葵ぬかて物へきお損く
源のよしりあふらわ　秘　源の羽葵へいと
院うもにきりりて
はこひしのふらわ
おかつのかうれ　此かとハ浄心まてお
ひ揺ハきりしく
文れてたハすり　秘　世文之世文れくら
きすすれハすりゆくよ源れきへさい
くえきしいつぬとく

めらく中も　平本実うちの義之　秘　あくによみ
きいのおもし平まつ
きりくし
あまりわく　世文うまれあまりとたさ
うきく人の中ふあつひ揺といへ
されて绪りまされくと本揺はき
と宮よくきいの揺もし平て源と
きみ揺ふきうるくし
右
大文れ葵とおきうき人の中に

しほみつとまをれはきこえてき
ぬれ人ゝしかるよりのさまを
私抄義いて
秘
葵の源氏
ことりハめゝて光源氏
月ともめ給や
葵の源氏をも見給ハ執之表を
関斗葵の死期の比なりてき
おしく思ふらん ―
秘
八月也
秋のつきめ ―

ほ
長途月を縣召秋と京官とい長ハ
むかしハ外官と住せる外官とハ外
國の守介掾目までをおさめ
といふなり京官とハ京にありて諸
のともかしハ任せられてゆくつかさ
といふ外国の人のひとし諸司をし
て任官をさつけらるゝ故之途月と
天武天皇四年三月始る
大衆し来り　九大臣一上之外小門児人

のたまへるハ陰陽をもさへいれて
うしろみなし　但當代の外戚なれ
ハ大臣よろしりとおもふなし
異本なし　弄 九大臣の思ならし
私云 諸家の人々よろこばし
いかりのゝみ　秘 人つきの不通
何の 方の宮ゆへ
私云 いかりのかむハ庭前よりの
ぬれつゝと方してかむものゝゑ

みなひきてさて　一さき西も此寺は
君やうちかとに　ゆゑ人の行方を頼の
此ならり入ぬ
うち代に流すへし　内裏に大臣此所
ものゝ人をおりあふせきのおもはえ
葵の枝入かなへなり
あしをあらえて　是此なみ寺てあえ
もの中よりきせ此しれ
それより　秘 何すもしられさ

まよひつくや
山のさすらひなれ　おもひの深さを
しきりに知るなり　秘　序云して極之
おもふ深きこ
此間業花物語にありけるを
し人ゆきあるべし
えきこえつゞきし　えん次さるべき出する
ハ鈔事さ也なり
まいらくよりなれ　此のけれ細しか集

より入て法入あるべしと
此松かしけるから　秘　歌人とは必松を
うる事ありとし
此の年なかりける年こそければし
また讃生れ事なとも松ともはさ
めすてときよく松とすれば
讃くせぬなり
私大鏡義孝少将の事　勅ノ下
なおおは義孝しきりにこえけれかさ

ちかひもふかくおはしましけるに此定
こゝろ四さいにしておはしけるを姫君
りしくへくもおさえ給ハさりけれ
ハ母上にはなれ給けるそれ志よ
給ぬともよろしくまいの母にせ壊
給ふ三はし法華経誦し
ましんれなきこと給れハ必ゆかり
てく尼しとの給て方便品を読
ませ給ひてそらにせ給きみに書遣て

と母北方これをみてきこしめしハあハれと思
ましましてかりしかれハ御身の上
さてまつりもりや枕を七ヶ帝
まいのやうつ河り積てみて
かれハ之くり給ひ年すきしりけ
母北方これ意見て給つら
志はりかし給ひとかくり川
くらかしふハわきもへしむ
とおもふみふりけりいまゝゆく

たかしもんな

かりそめふ 病生みまりし死相の世之
たかしうかなと いまそてはうとさ(れ)ども
の心おもしやたやうの思をたらしなり
うたてもあり つき事なり
かしこき事ふことをうへて世中をいと
うき物よ
関かしこき事ハ蔘之世中のうきハ
後の流住まり候ふ事ニ御ふか第の

事のつふをいそしいく
私ニかりしこき事ハ蔘の事之帯
のいとうきハ物のけまありし候し
人の事を契すやうへて人物ら
く契さりしもやけまのもいま
たうまぬ候あまりの思ふひきて
りしあれハそいまひうひ候あり
のるまめくしし家物のきまは数
人まてうへていとりしく契すまみえ

ちりいて
相違なく
涙はなかりけるを
なもごじしけるに　面白しきや
ちまりこきせを　大臣のおすき此中よ
もちうけるきを云ふれはつまそを
源をひきうしくさるやうし
いきやくりまて　秘　人のきまりにつき
左かり頭しさ高しのまそし
頭ふありきよ相ぬのかりけるや

さりくのは
秘　葵の御逝去八月十四日の葬送
葬送八廿日余之
いみしかりける事も限なり
葬送につきて仏の事共さ
せられのしたる面白し
院をいさしけもいかきはいの文ま文
相違法門度遠の中文益泉流るまゝせ
もこよふとしたちるさき頭と
弁　ぬきよふ事なし同なや

関守服ゆるしてゆくへぬや
文選第十二郭璞江賦云神蜧蝹
蜦以沈遊　注云　神蜧蛇也蝹蜦行貌
又日本紀第二豊玉姫化為八尋大
熊鰐匍匐逶蛇
秘
いつれもをもひはかりくさ海之　弁
愚案　モコヨフハ　久ヨコアリク貌之注心ニテ
毎子細也
弁
文選ノ義　永正七三注し　日本紀　日文選　こゝろ

永正八九注之しし
私云澄明カ子たにとられてゐたる乳
文の詞あり　勘へし

よもきか杣　葬送の夜之
いとものさひしきかくれ　など迷骨事之
ありけりける事なり
はねのまうけしたと　秘　葬送るとおきさ海

ハいふてかくれの事やされと源ハ
名の此事云を行ぬなり
人
人ひとりか何まうしも　人ひとつなかり
秘　人ひとつハ夕かほ上云といふ　幷日
何まうしも兄源氏ぬ　名おすに源の
かれ源氏ぬ本よやおしてかきや
八月廿日何まを此を明かれハ宝我かをて
れ　打らあれかて涌くし出き存れ
源時比東此月の事　なきとも

源事あり　幷日
同事　夕顔　葵　乙女八月
うせ給へり
むかし此世にてはしなれはひ給つる
八月廿余日の明かたに大臣殿と
なかなかの世ハかれはしのしのやまと
見しえんとー
そのみちのえんられ　源氏さ海か
なき時の珠さる事せ

源

のこりぬる桐ハかれしおほえ人て雪も若葉かけはし

秘　源氏のとり詠しきふや弁説ハや

葬送の後車のうちまて詠し給ふ

此源よ夜よたりしつきてとあり

露ぬるゝまれ行ゝす　源之

こし此の紅あり霜を　源の葵の車

とつくしとそや

秘　かつて濡れよ八　年生ぬらしみのある

さぬよ浮かよ八かんなきとさるへきとし思

袖をとうり

世とへてうしろうしさ　葵の巻

と源の今思ひ給ひぬや

ふためつれけり　秘　本書の膝の文のなす

きや　性體や　春日

関中より文のふくらぬや

しれ行きしるましらハ　秘　源氏思われし

行きたらたりハ葵上重ねて

あろへき袖をとらせ

ぬるく我深かりしとおもふらん
関守は網おもしろく半宿りおもふ
ちさへ何りけれとて心をいひお
しらぬもしさらへさけてなく深
かりしとなるをさへ限りあれはみすかき
衣といひうけらむおもしろきかり
あれはとは空限懐眠ぬるりめ法会
れ定ある事や

源

限あれはみすかき衣あきられし涙の袖と関るゆき

限ありて定めたる悟眼をささげると
いくさまうれしき時は衣れ
ものりすさ事とそり

弄

名残かなり何れはさめしくも涅
すまく　はか秘に開
私涙のふさを関とりすむいと
行て衣ふりかもつや夜と
関になりらり例は物にあなる
月本て贈答のなかり

ありくはさんはいさんたいしと
河
法界三昧ハ普賢菩薩の徳也天台
五佛頂懺悔過云 傳教大師作 南無法界
三昧普賢相 又大唐西院和尚礼拝
調云く法界三昧普賢菩薩ハ文句云
大論 称菩薩爲大士亦日開士大士同
事也
弁
善賢ハ法界にあつめ衆生を三昧に
を観音ハ慈悲也と三昧に住りける

大士ハ菩薩也 三十七尊衆会
内善賢三昧下大願薩埵 秘門
法師ならしけり
河
けハ勝也露なりけるを又寶にちを
ま清け字なと又云賢也又異ハ万姓
払法師よくはなりさうとい也
うたうしのよれ
河
むまひをかさみのよたまうらは
何みしのよれ露とそけまし

弁
母擬にありし子をみてよめる歌之
うちつけにわすれやはするさむ
涼のゆふくれとゝもにせめてうき夢
や此歳月分一さの袖まてぬれり
交ハ志のみりて　秘 母交之
傳はきれハそこき　承お中法のすとゝ只
御すれ
秘
此頌ハ彦亦の此傳受のしるしと
云ひつけさる事の出来すゐや

凡此抄録ハ盛衰の子裏の理をはらく
年ハかりハ其今葵上ハ夕霧と運
生ありて男子ありしかあまたなるへ
きにそ此事のいてくるといふり
されめふさかうあり　葵の事と葉記
あり深しけてりけると
まさたくひおりせぬ　秘 女子の兄弟あるさま之
神の之人の玉のくしけふりもん
何
筆壹年上く睦指心得し母　伊行人

或抄云召頌文ノ句也
奥入云此本文也裏ハ袖上也珊
瑚といふ事あり

弁 本文ふる明ならぬ又切なるなるも
ふくひなきといふ本文不分明

私云 高國御氏 清名常𢰤 ひろきも
とられてうけきけりとおもひつく
しけるか此中に 当道の後
なひとてありきようとまてのうれ
むらさけるんさらうとうしろ

さあらけりはとなり

二条院よりにわうさ海にて
源氏二条院へさんたいせすと海て
御前之ハ中くおハせあく
あしくニハ あひ給さしるまへ
かれ文ならハ宇宙文れ者のつまさに入
給まられハ

河
宝亀三年秋此間下定之所なり清
入給まへ在京府ハ左衛精進之清ハ

北陣以東ニ廊屋とてあり弁着座
請印儀
兼日上卿著陣令弁侍奏日時并
定申前駈以下若蔵人奏聞或
殿上弁　当日牧進扇五位蔵人為勅
使　以若五位蔵人兼日奉仰令殿上人調之以若
五位蔵人催遣二三車牛并内侍典侍
侍蔵人所前駈次入御野宮　一参如
入御請印儀

秘
八月ニ請印ニ入給へきを去年中ニ
大内の請印へいり給へきと三月おもと
ませなるつのつきさし入給ふよみえさ
れとてやかしてみえさえなるの
つきさハとまひ抜群や
そうしきはちまにほうり
は
蔵言に澳斎や
秘
いよく澳むかふかうしつきをかふく
秘
請日ニ入給てハいよく沐事蔵言

るすへし今源氏葵の猫の形見にはされ
とてかゝりしまて文をかへそもなるへし
うしとおもひこみ給へし
私云うしとおもひ給へるは文みると
此源氏さりのよすかともへしなは
此葵の事也せてうへていとはしく
とハ猫のあるとの事と見給てから
人のなそうき物としとりきれ
んのれいてきたりうるへし

かくあれおもし　秘 夕きりの事なり
秋のりしさ給はし
私不及用意也　おほろけともありさき
れんらうへし
まりさいれひの事　秘 紫上之
さりしくて押し給へんとは様
二条院へもおはしまし給へり
うつハ三下のからに　源のさ給へおほ
とくのは仮給し方なるへし

歌の心ハ　女房達く
ちきりありて　御ゆれありく
時しもあれと
注
時しもあれ秋やハ人のちきるへき
ワレワミルタニコヽロモナキモノヲ
さらハよさむもありかたかりしも
本歌　秘
川なか月　或抄云さうハ衆生よ
ちかふ比しものなとちらにハひさ用
へきれこし
えりさすハ世よ人念仏れ

秘
おもりなら侍なり
注
常行三昧　引声ニあみ経と誦する
ふくさ秋のあはれ
秘
川なよなくすおもしろき頌之
月みてしみけるかもと
吹よれハ身にしみける秋せとも
うさき地と思ふなるさ　紀友則
吹よれハ身し　注　よハけかのこと
まれなみくも色よ世りおかしなるらん

やよしらへきかよさむく秋風よ
風ことも何かはなるへきかや

何しよ時へる胡かきみ芳にばかり
わかしとおもひて春つれなるや
うすれなつひ文にあハにならむ
人とみえり

草のきしれなる

秘
いまさひけさうさといへり

弁
ひきさしう郁うへし
国守開うむまうり
あさきあをふひ

弁
花田ふあとき柿なれ
ゑ之服たれ方への紙れ文うるへし

秘
花田れあさや菊れ紫の帝よろ之西
なるへし

河
菊れ枝りハ白文ふそて生気みよ
てもつうへなれとをいまさひらきてハ

書はひれ紙と用ゐし事なれ共
わりなきなり
武納言文に云れはみれにおもひゆ
くらひて見れといふて源の時なれ
さしときたるにやと閑半は皆同
いましめたりけりとて
何ともいふてときたると思ひかく
うれみの花におもふていさめ
くりと源氏物語へ方詞にや

きさてぬりしハ　弄　みわ詞
花
人のうけさいハあふまてさはまさるらむ　秘同
うれハきさてぬとく
宗長
人のよと見ときくし露をききたとふし袖と見えうれ
弄
菊はよせり　秘同
秘
人のうへとやてし我川も同事也
おもひやれてあれハうるなれ
松云葵のすと書に云花は云鬼の事
よやてし露けきさ小源のうて哉人

なりひゆうくとれ義ありて
ことれそらふたりひあまりて
異 回顧ふすそいうと云ひつひすく
ともや家と示ふるりとくれなり
秘 あれまそみの調と
武抄云ききてぬかとりもた秘義ぬよ
まりりふりてとこうかと云文の調く
さて源氏はうさうりもさうへ新なる
らんとあれハ此義一説ぬ云文異一なに

源氏家と示へ此哥とハかりわきうとく
しきうとふとひ顧ていうろ秘てとり
あしれとしかききと記あり義ハ別とさ
つゐりもゆうま　生得ふ理とくれなり
ほれうの比ふつひ
秘 今此哥ふ此あらり此事ハうらてうりさけ
まさむふ理のかへすうろ示ハうらとききか
こときとくつれうれしとハゆの家ふうて
出顧つう人のしらとかりてらとと

ゆふひ待つまでや
さりとてかきくもし　秘　源の心や
これらの文をよく見れば源のみさゝきと
いふ事ありてよかんえとみて
ふかりひのみなり
人のはなれくらめくべき
関白二条のさとゝ源の義疑るハ地の
文字ま出頭しる源定なると人のまる
へさてくされハはなれくらなり

ゐよし人ハとてもかくても
秘　葵上ハ定業にてもありつれさる之
さどくと　さしふかりれ地のあり
何のかりしるく声よきくしときく
頭の冬ハられかとさてうとなりくれ
おすむすべかすまする中し心ハ一風なる
さくれいひつさとくさ中に思ひの出ハ
源の心をえ出家しうとすきりくつま
きみをかりとなりひとつのあなり

脊文れはきよ候なり
秘 いま脊文ハ一般の衆するによりて
操下ゆみとまりせよいえと
深のゐめつひ様く
ワきしあり　秘 ワきしとつれ様よとれ
ぬすうしてハいうしとせ
むつさ紀のふくめつ渋り
は 生れ候ひてふひ文まかなひらえ
む 花田よあり花の介り多くふくめりハ

秘 いつまて脈志れ周り文かり
秘 ふえめりハ候みなりせよひ多せ
ちよ候りおもく御よけりと
秘 深のみ同比おもしかさ心あるとえ
こよろさハとのお神へありあり
深まし云さおもハ　深れ悸脈の事なり
秘 操下ろりふよりて針砂ちなり
む 深まし紀ハ候かりつさ心えなり
ときさちえさく御れとそうあなか

らせ給へきとおもひけりてきこえぬを
侍りハおもしろからん
私云ハ文字を不知の詞はきこゆるね
すしハおもしろからんとおもひとりけて
うるさくみてさふらふハおもしろきれ
心ともおもしろきれと云詞之つゝ
ましきうたとハ源氏の勝たる事之類
らハ文字を不知の詞も神事のやうな
つれなくおもひてふかく義をみてきゝらへきされ

如何　花秘　弁ノ義ハ各別之
この所の心も詞も難儀なれハ心をしらん為そいふへき
秘　世間の事常をしり
弁　心をしらんとハ文字を不知の物のきこゆるに
かゝり語事をもあらぬ事也　秘曰
私云て八世間の物語ハきこしも
この所の心も詞の事ハ奏事
をとを見て思ひかけくてハよき
事といふ下の心を文字を不知の者を

うとにあつかれ執見れあつきさハなれ
きく事とみてまかせる義也
たかしけちてよかし
はかとれとこうりと思ひまらするへれかか
何事もあさるうせよさのくおおりし
いり執とゆハりのくをよへ給よとか
のめりよう綱之
何事も世よ心かうこめ給てうみたこ
すハあきさ事とそ文を示しと義訓し

へう仏く
執云　河ノ義いろく
浮らんせすもやとそまれみてと
何門な流みてしと
沖事うれハ操下れみハをなれん
せしとらるよろり
秋文れ流るよぬうりれをりすうれい
操下のみハ浮らんせう流にてうの
そへといよんく

弁

胀若のことくれはみられハゆるんせぬす
りやとてはみみて思ふにとくさに
くさぬよりせからこ事たる詞られ
色し

秘

表衣紙られみえしと河内本紙みてと
なきの義ハ河内本よつきて候せる
終とて表衣紙ハ先まもたりま
河りやを定家本のみれ詞とやすけ好ハ
おかしきらんとあるとうもそられも

とみゆへしおさきかくしおかし侍る
源のみれ詞まさるハおかしきらんと
てと以る詞のまゝや
私云　以それも禅不有此事とみゆ
へきれ
さとにおハ候る　定家本れ里本しや
しれひてみ侍て　以それも詞ま禅不不み
とハ非事にそうらしみたる
かのめし行つる　秘　海への句をおおし

けちてよりし此洞の事なり
人のなみて　はわかあやまちなる事とかや
志なんとおそろしく思ふ所なれ見とハ
おそろしむすといふなり
私ハかうかうやそてそおわらや
されバこそ　秘　わが霊ニ出る事ハまこと
なりけるよし思ひしり給ひや
まいとかきりなきさ　秘　文を示れ給ふや
弟れらへとさ海しよそなつきぬ

院みていふよ　桐かのなんとなり
こせんだされバおおしたれバかならず
弁　桐の御門もお坊とハ御兄弟なるよし
此洞まてなん中
お坊ハ桐御門の御しんかおれ
奇文もみえ出さぬ御めいよて
海すえ中まて内をみも志給ひて
示れ事と院のみとれの給ふすく　弁同
一　その御かりみると　秘　お坊れ御かいりおりとと

院にハおなじくまいりて円ゑみとり
たえと久しくおもひしほどに自然の
みそのかけの事ありて
いと本説ハさりしとぞ

やがて円ゑみ　お坊ハ去家之となり
終てうお坊とかや去家坊も
大内にありしハやめて円ゑみといふて
清涼殿ハ東京極也あよりおハせしハ
父大臣の里第へ退出の義也

心もとなかりつるにわかくしき　秘　桃源抄
にあく清うりよしや
礼いおんさみえ　秘　清涼殿の思ひしかなり
私地の事ありしかひてうつかな
の事につきてなふかとれ男女心
みてうきさや

さりハ　家にかとさしてはさいあり
おふらうとい秘之
昔よりなかたく　秘　ようあり人とぞ

野宮乃御うつりのひ　は四条の西北去之
斎　清まはり北まへのそふうり　秘日
也　延喜式云凡許内親王定畢即卜
宮城内便所為初斎院　秡禊而
入至明年七月斎於斎院更卜
城外浄野造野宮畢八月上旬
卜定吉日臨河秡禊即入野宮
自遷入日至于明年八月斎於此
宮九月上旬卜定吉日臨河秡禊

参入於伊勢宮
今東斎宮ハきくて三年の御精進
まてその中ニ三ヶ度の御禊あり初斎院へ
入給ふとての御はらへあくる秋
野宮へ入給ふとて又あくる年伊勢へ
くたり給ふとてのはらへあり是は
のほりつるひハ二年めの八月の事く
夜上人そらし　いつきさへよしの心とをもかや
朝夕の秋のまけありくと　北斎のあり様

とおもしろくかきなさせりやにらんと
ハ此めのことにてなりし
きゝ給ても 秘 此文字ハ天性うつりわろく
まして心よせことまいらせを
源のさ給てや
とりなし 秘 人々と源氏さ給
てとりりと思ふなり
世中に何さ 実を示氏保務ある人をも
給てハましておもしき事やときこ

に源氏おもかけく
御法事ゐたとめ給ひと 正日まてハ 所
正日とハ四十九日め之御仏事也
ぬりとハ遍照若を川おもてをとふハ
秘 まゐらせて
四十九日め御事とはよく法すハ四十九
日なりらに志あけ給ふへし
いまゐらり 源氏行へくとおほいの
故三位中将のさいしよりうへ弟

秘 頭中将

以中将く三位に加階事見えて見えたり

三位中将

は 文武天皇四年月日太神宮市磨

始叙従三位

延暦廿一年十一月日坂上田村麿叙

従三位元右中将是三位中将始也

秘 源門侍之

かの門侍を

秘 源の内侍

たくおぼえたれ

年老たると祖母ともいはひ経

うしろ安とおもふ心く

秘 かれいさよひれさやかなりきりし

末摘花よいさよひの月よ以中将れ

源と見あひしあとしける時の事なり

花撒後まての事也 秘 来年月

秋の事から 末摘花にて常陸宮より

の文胡よ以中将れいと拝みよきなり

うしなひおはし時の事也此頃かやうに
よくゐとありてふかくおもはれしと也
てなうへくし　弄月
花 是ハ末摘事也以中納言のかへりけり
おほ内山とよみしハ去れ事ハ須磨の
末摘花君ハ去年は秋ハ秋の事なり
さていさよひのさやかに秋とハいへる
私云花ノ義いさゝか相違ナル義
と見へ「

くなうく　のうろ事なくとハふ也
時なりらして　秘 是ハ紀の事也十月
よりてれ事也
弄 又一説也上の詞の日日とハ見えされ
私云おれ詞ハ此別と三位中納言の細
おりしてれさなと右くにいひなし
日ときしてとハ心得へからす
中納言よひなのさしぬき
花 中納言ハ姉妹の服三月いとなみ廿日也

鈍色并衣平絹色律家ハ宗旨生絹
裏指貫ハ夜色ノ月鈍色ハ秋苑まて
深くやうすきを八十月比更衣比
深く色とうすくうすき之
更衣比深く色とうすくうすき之事日
直衣花よあり事

秘

私更衣ハ四月朔十月朔両度之

服者更衣事

伝

万寿四年十二月御堂薨 長元々年
夜ノ御清守佑開白有更衣被着夜
装束重服相之例精服更衣勿論之
縁任ニ云服者装束衣替事云々并
并官不為之服官之有之向余人不
必着之し
兄弟の服これハ色相すくなくなる十
月比更衣之姉妹の服とて着する例一勤
同父兄弟姉妹服廿日服三月之物
忌念此也

私云 河のをとみゆるは三位中将にて
されは更衣しらて
いとをゝし 河 雄抜 日本紀 雄しき之
男しくしき也て 三位中将のさ比之
是はおしのつきしと 源之
うみさしかへるふ 此花は宋気と思也
此雨にあへる涙やたりける
雨しうりそとやみなん
河 文選 宋玉神女賦曰 我帝之季女

石瑤姫未行而亡封于巫山之臺
所謂巫山之女高唐之姫旦朝為
行雲暮為行雨朝々暮々陽臺
之下
有所嗟二首劉夢得 劉禹錫之
庾令樓中初見時武昌春柳似腰
支相逢相別而如夢為雨為雲
今不知
鄂渚濛々烟雨微 女郎魂逐暮雲

帰只應長在漢陽渡　化作鴛鴦
一隻飛　劉禹錫ヵ婦ニとれて作之
秘　劉禹錫ヵ句を引へし
はらうえ渡さ渡へり　源のさ渡之
女まてハつんをて　秘　中ねれ心之
源とまりらてうて好人女れ執心
のと海ヮぬ事ハあるしと中ねの又
ありしきんうら思ふと之
ちうり浅いぬうへく

中ねの源氏嘆えちうてわ渡之
ひもいりとさしうとして　悲哀とひ
かみのいれひもうり
む　夏れひもの換しうまりてより
久うくし
秘　花鳥説頭用中ねのちうくぬうな
さとけなきさ姿とをこし川てうひ
て悲哀れいれひていりとさし
うとし行つうちくし　異同

されハいましきこと二位中将なり
源氏ハ夫婦なれハ三位中将よりも服重
こゝろえさせ二位中やうハ濃紫とさせ
私云抑此うしと云位中将すてにハ
子細ありけりと
私云 河ノ義 不審
花
本妻此服ハ三ケ月之源氏ハ夫喪
紵ハ凡そハいさゝか二位中将なるの志
此浅深ハよりも二等之ひだかりと

さしうちとさハ夫此紙の擣しうらう
くりてうりゝ之ふうしゝ夫衣ハ重服
人ハ無縁ありいふ人や輕服ハ夫喪ハ
論之級共志りゝくりて夫喪共なる人
の下なたゝしゝ又
私云 河ノ義 不審 本書此服ハ婦
妹の服ハ服ハ白服三月又ハ輕服
也故ニ三位中将ハ夫喪此深く見えと
もうすきゝ之 源ハ夫喪し紵

いふ本文のまゝ又は古きや源の文
なり給ふゆゑも生きしふるきゆへ
うれハあり
秘弁 花をミてより
くれなゐにやうかる
弁 蛭脹よあのきぬと申事例あり
むかしにみえたり 下襲にあるとみえたり
花色きぬの事ハいと
む 蛭脹よりきぬと申事ハ長保三
年二月一日定子皇后の御衣より

御堂関白は大将下襲と見え
給ふよしみえたり 此事要略に見え
子細ときかせよ
中ねもいとなれ
秘 我妹かれハあはましと云出給ひ
三位中将 扇とかりよろしき宣れ給ひてといふれの事にて侍るなん
秘 源の誦し給ふ首とらせて中将に
よみ給ひて あの劉禹錫が二首に侍
のうちに只直長生漢陽渡とも云

とは葵上の御事へいふてとし定かならし
紫上の御面白しされと定かならさ
れはみやふさへらあるへし
源清かしやとひきとみせうると
抄
此説なりしろきかり他人の事な
らハ源氏よりみなけ語へきと我妹の
事なかなし早なりかりあ極之弄曰
私源氏かしやり分あるへきされ
孟
みしへの事とゆかしやぬさへいとは故よかさ給

弄
此分むあはまさに給ふまの余情され
とおもふへし
秘
面白分之給ふるれ余情之下中納
言ハ源氏の御事ともけてよめる御事之
是ら事とは事ともとひきは有て
いよりみ人の事とゆかし八月ゆう
かりしかるや神かりさせきかうり
なきとけかうしはされは打しよるか
とあしは事しまていひへらるむ遊

あさかぬかと　秘　中将の屋之
源の為へうき波は寄くしゆき之
あやしうとはて
秘
年はた又大臣は浪しまておもひ
あふゆくみ人の心の内義則左大臣
みし様ゆくらしきりこさにうへ
かりは流なきしと云よ今の源の
越播はきみてを実は流なきしはあさ
うさりけうらしいう葵よのおら

しくたしこき事と中将の思ひあまて
まさ源の流なきしもはゝをひらきて
くいくらかもさを　秘　苦痛
弁
われら下常は中まて人あましそこ
ばかり勝く丁丸こし
注
十月ばかりよここ夜をおりて人
此をこせらりなれハ
冬乃かれと君ろかきのに咲かれハ
むへところてまちしりまきり

とゞめおきてし
和泉式部の孫
ある源おもを
小式部をとかすらく
是へ小式部をそれ

わか老れハあのゝれ峯相れ志して
夕きりハあのゝ中ねのさらさらあと
まて大夫へ渡れさてまいり給ふ
若かの藤よおる格子とりかし秋風みとなみ
同半若かハ小ハ葵れすお格子ハ夕霧かし
私立るてし二ハ夕霧りかし秋葵嬋地
おひとりてや　并　夕霧ハ大夫れ猿よれ
ハ葵れ上よりハ次かりへきんと大夫への
事へ　秘目

あハこそもをそれ
かれしくおもふらん
とも何る孫ハ小式部
なし

秘
後拾遺哀傷　小式部内侍うせて侍りて
てむまごどもの侍りけるをみて　和泉式部
とゞめおきて誰をあはれと思ふらん
こはまさるらん子はまさりけり
哀まさるたに似たるさ　中将の心
事そふ風につけてこそ木の葉よりもあはれなる
な
後成の式部の詞とかりてよめるや
所しらぬみねの木の葉の目にふれて
あへぬ物からみさられ

秘
花ニ後威ゝゐといへり
私河海　寡婦賦異し
私いはくさ世にまとひてさかときは
め頼く泪して泪なれともつかふハれ
あつとうみさもさかりく之
と本ニ
今もみそ中し神とて深く頃まにしをきと
弁
うきさうあまみし八葵上代うしめまし
私云此御文字書しをしこと哉
見ても今も見てといふれ

うた綫いみりつなしうれハ
私あはまれうしさあかくときみまし
なかれあはまきハ　しれなうしてあはま
うつ泥れさ海うすへし
秘
呂とれ地のあつれハ此種れ姚きうて八
かひあうさ海れ所をすうとやへきさ人
もるしとやつけりハうらとけさる定
まうもうくらてしなの女ろうるあは
きうとをハ見ゑりて頃り此所へと

源のみしり給ふかり
くさかとうれしと　秘　蓍かさ之
係え海とゝられと　似　源よりわしくと
とられ給ハされハかり
さの物とかりあつる　秘　さかれ神と前
かりその物之
弁　源氏より槿文へひさしくとられ給
ハてみあれハ例のけさかみよ事と思之
もはみと内にあてこしやさし物

かのあはれりけかみられハ世房の
ともしあしとて法らん世幸かのされしと
され物とかりみかきとゝり　秘日
私はいさうら分へかし妻した
えさしとけまかしハ網幡りてハ
かけまとさもみかよりハ右事かれ
中なれハ今見もらめん事まてある
けまハ流らん世さ事か之内ことの情
かとかり給のぬ中ハみかよりも

おりましさ事うれしとはあきらかな姫
君へつまうき袖らさりしの流也
事ちとはしさきまぬ露あり分ふ
とおもて行りさの袖とハ行あ袖
まうりつまうる清あひくとふまや
とらおきゆり

宿
そのハろしうら　何　純文唐紙や

なむ
中足も脈ちれ月りゑせ　秘　寿日

原
ふてはゑれかり袖ハ露きれ地之秋ハあまき倣　作と

秘
あきらかれ姫光ふたけてとりつまきく
てきとふうらしうり

いりも付露りと

何
弥うありさ何てしそれハふうしかせ
かく袖ひつりおりハうりりとさ

秘
川ちよくゑまへり　寿日　源のくとと
何のまへり

流れもとんとしめて　秘　何とられ中ま
一脈とうつくしく雅してかきのうちや

もろこしかさゝき

秘 はしをすりかさねてうゑ人

くもゐをせれをもりてるし給

ひんハうこゝき事也

こゝろもおなしこれ　あさかれのれ字も

かうくひのかり云ふへく

あかうらの山をさしていふ

何 白雪の九重にありこゝろなれは　秘 是らみの廻

大内やをしても云ひかり　曲備

はしのしれ是弁外大内山の事

今の心の心ハ白雪のかさなりたる

と云事にてをかし

む

たらふ山をさしてれし大内のすへてのものを

わたりの南殿を宣陽門の内の殿よ

ありあるの東殿ハ従明門の内の

殿よりも中の重の内や

西京ありみさり様の外出の

事ハそうさの事をとりまかれ

ののちとハ心をいうにしも

秘
いたうかれ絹とみえたり
太らか山ハ大内の事也大裏を玉房と云
とあり　主意　まことハ亭子院に給ハれ
大内山とハ亦なるなしまする時延の時
納て菖蒲勅使にて来りて白や九
九し　おこり　もていひけりと　讀
し事と思ひてし源氏ねさひく
こりたハすまふよまへての給つる
やはと二統とみれまてりまや　并同

関守須のこりてぬ絹ふすとい之
え也とて　関守　松　并　浅ニ同し
何　又まつハらつりハりもそあてまし
秘
思ふこるとえ也こせけり
川ま日田かそをまこれ事と云事乱し
ここのらとハたき也ここ後り
思ふかとしえこせなと以四之　并同
左傍姫夫
胡蝶小豆とそれねとましてるりまめ候之
秘
葵上よとそれ給りやせうらこさたり

ちさゆく

るふ事まつきても　源の心に存てれ事

こゝとなむひつきを源や六条院と申

ろまれをくれ給へりてましおもひ

可笑あり事と下ま思ひの心之　弁曰

はつき人しるし　弁　権大まししハ若つけ

うまれ事となむひての源や源氏より

つきさ人くされしをくれ給ハゝけれし

らまつかとりかまそりけむ　秘

私あやまりてうち事ま此に侍る

源のくせ也とて

秘　文を示されきらひ

ゆよしるこて

せ世東れましりとふやおまりゝ

こゝさ人ハ何しめおるや人をゝと

あさまてさへしとや

六条長示らされおなしおか

しあつむろく

私人かまらむしゝゆら権らハゝや

色このみあるや　はまり躰とハ本るゝ
こゝかしこや　権者ハかりにあらはしたるに
はかなき人とこ　秘　世上とハらくあらし
みいの姫君ときさハ
こそんとや
さハあらしそしとハ地よりうら
すまハあらしそしとあら
こゝろハ生長するや
はなしくまて　秘　世上乃事也

めれやうきさ子　ちう乳子ともあり
秘　源中最秘抄にハ用此説あり
不用之
もんめ和しらしろめつくいて思ふらん
弁　世上いましく実事ありて抱えんし
うとなさかもの事也
秘　世上此ツリハ我とうしみ得すハ
あつましきと思子のし写すきとや
聞辛いましく嫉妬のうたき事也

中納言とし　秋　葵上方の女房源の心
うけ給て　弄
ほのかなりしも　はれおもひのかとも
中納言の君にこそ心かけ給ひぬや
なかなかなりけるを　中納言の心
おもひきは　よれつるのさなりも
かくらひ給はや　秘　源の詞
かうこれ日は
みられしくて

ほ
見えられまれにまれてなくは
さらりんや定しうしや　弄
川風日はまてつきり　同定し
うしやすみなし
秘
いみしき事
うら思ひめくらす　秘　葵上ノ事や
泣くこさ事あるこしや　地の事なり
いとみなしこそ　さすか女房を
のさ中く地のれなり久まてみなさ

うきしらうきまし源のくの濃
なりはよし悠と侍すや
いかひなき　秘　これしくの詞蓬事之
なこりつきさ波　秘　今より八源氏漂あも
何ゆへ其のあまへこされかりしや
わかれとみえわかし　秘　源のこれかし給へ
かこりつくはりくは　秘　源氏ほとてされ
まつさこへ玉章あまへきとそとく
呼つき人　蓬氏おいせにともすま

堪兼てさすぬ人さまあはれ
恋へうとしじうぬをいみはてんとや
いのちまきそゆかりし　秘　寿　川舟の浮舟

関守

命たまあらばあふせのうらは　九禅上二八
（やすかりかれへかりけれ）
なかかわりのきつしよ
火とうちうみの夢　秘　契りし源さしはさしや
みつのとし

寿

は絹妙せつかかかし

こりわきてらうく　秘　葵上なりわきさ
なかしらめしはてさゝ之
ちいさきわらハ　　色あてさ之
は
葉月花ゑ上東つ池の上童にある名
あかりしみたりと着ぬ物ことに
事さく御かう事之
はてさハちいさ戯まて　あてきに源の
宮人詞にちいさハ葵れ悩のりよ源
とらのめと御かりけうり

かくるきはにあ　秘　羅うれハちいさき紅うし之
ふうきかさみゐとざりしなれくうし
は
星汗衫　萱草文　紅の黄くみ
よう文あり　画服之
秘
服君のめうり文之　花ニ垂　卑花ニ垂
萱草文ハ柑子文と大略同し文
む
あひハもかりもたしさと入て深う
よりしみえりふうさゝ絵うもりハ
ちと黄文れあしまうり

秘 源の詞く
むかしとこひさらん人は 秘 夕きりゝ
おさうさ人と へしぬやうのき
心るしふかへこさ
らへとあるまじとのゝ源の宮人く
いやはし 秘 何し宮ふし葵れまし
くしけめのやうハ立入のゝ事も
ありましきとゝ
松葵のあいしまし 時さへけ
らしくしきわしありしよ源 て

と思ふ人々の心かり
人へまさハしくかとときさて
秘 書き物うしくりけ給かり
人まゝり差別のあるへ
かたれたるみ もて何そひ物しもしまさ
源とれたるみみてゆうしみな葵
れ物もうら
君かてれこし 源のりめて出家の
さ宿く書き物うしくハらぬ物のハ四十九

日のはうるへし
流れんうし　源氏お駆うたれ人々く
おりまりかゝる時毎　秘 此雁村持くし
とこしひさしおりつる袖
此時の言海思ひやりへし　的数さとも
て姑親もいさしうひさしおりつり
今源の出家をうしの言海折り
かうる定めきし此感情かゝるとも
みさ海思とつまそてゐる下とも

おりまりきこえんとうるへし
此かと源の葵うつにたりしかれハ源氏
家司以下倍おしまゝる毎へしかれ
とさりひの人々とゝいふなりそれ
人々の説々ハ法をまりぬハ二首題
まりて源と紛しへしとて朝つさん
ちゃれさ海一段拙さかしくうるとも
しみるへし
ほかりもとらむまりし紀　あるちのふ

よりハなとゝおもひて源氏へさまて
も何ことも心ことならむと思ふ人
くの心中とおもふへし
又もきみの事しおほす
抄　源氏出給ふとなり
宮の御おもひけれはこ　源の出給ふ
と大殿へつかひして御いとまあるへき
也りおもふなり　抄　源の詞
源の宮の出給ふのいとなしと思へく

あからさ也　昆ともかきりなき家
とやかの事
うるさくおもはぬ　大殿のこと源
のおりしらうハ思ひのほかにもあれハ
人してやしる
青りし入てれなりし
大殿ハれをすき父のさ源ハぬなり
なしそやうて　又おもしハおりしらぬ
りとえかけり　抄　おそれ枝傳のさ源なり

けるてもひきとられし　大臣のかはり神
とあてゝ後とまうしけり　弁　源まむさひ
なく久しうめでひ
ようかうてかせ
よりひのつり　秘　大臣同
さしあるましき　法服さとにと
りりすてありれすてかささうせるまして
ひうよあうてありしろ
せめておりしつゝて　たしぬるとこ

のさ後く宮ひのまうの植と云ふし
源のさ之
秘　源の詞
思てきひし
とられし人立かまれ　河初え
さ人の露りのしつゝや世中れ
とられ人ころあしるまさん　色紙
世のさりし
私悪の字とをむとこし然らハ悪た
うきとし以事うとし同しれ安あり
こさ事れうりひうしつ中札りりれ為遍

亦曰丗世とハ五濁悪世と云ハとられし
先の事ハ濁悪の世なりといふ也
哉抄さうし名にはまされ悪の字を
万葉にハよ海せられし
私ニ悪の字か
さし給りてハ　眼おある事よハ世
此うひとも思ひうまれぬうらく
說もかりさ海そうし給んよとしハうせ
抄　又みかしの流んと源のとしけり

ての給ふうり　本
さはしられもひまうく給ふとられぬ
阿さみてそのし
秘　今おしれ哭行けも源ととうそ
見給くおもくことさうけて宮ふ
さ海のあいれうう心みうさ拙
私しられのひまてもおうまれさ海か
れハられぬされまうく說其てあれ
もおたのりよかすせ

関守にし源氏のからかへりてハ
立給ひさに石山之まれと大臣のとも
りけりて柳営ほりきさ人きこらそ
のしはう心用三の程弁物之
らうたまりし給ふま　源氏にまりしまゐ之
さしらそて　秘 一石まゐりつかまつる也
あはれとみ給　源の心也
おほしをもまゐり給　秘 大臣の詞也夕霧事也
弁 右大臣の詞也　女房達より御て

わか心中との給へ
秘 人霊の事とのたまはし
立よら世給りし中まうしきあ給ふと
源のいはりしもかまりとやらん世を
てたいせある事ハあはしとおもふかハ思ひ
こゝろと思ふもの関守にハ大臣のく
いひきかせてくれ心とうしきもう
とも北殿の義一段也
なとひやりうき女房　ふおうき女房

きこえしも源のかたりはいへることに
ハせしと思ふやおもしろくてつらて
うしおほしくてさうせり
まうけれしぬる　葵上の死おもらも
源の生別と深しあはれ深く
おとりうる　衣も名は思ふ下むなく
うちあけおりもれ事　秘　源の葵の
源のきよらかとけて悔しく事ハ
かゝりしまして　や

ゆりも流布よりて　秘　かきてハかそ
ましぬとこのみなりしかく　秘　かゝりハいよし
けまこの思ふそれ
心おそうきうりしく
秘　名のゆくく悔とふ思ふなさし久
うしくまれハとさくしてもさき
せ頼りね事あしく思ひうるむ
まても悔しに思ふそしとせ
いとあさそうるか　奉　源氏也芸也　秘日

汝とまいりけりとて　関守大臣も葵
の君の時源の跡をとふらし事と
の行水と源も又跡をとむ関之源の
葵上のつゐまうらとけ語ハさらし
事といひあり
よつはれ同ゑて　関守りといふって
心ざまき史ようとこそ事も近く
今ハ中くさゆうる御きとく
中しい海ハ京をとりのまて

并葵の於ハせしかとハ波らのさゝ中て
とゝえもおりしといふんかり
いまハれらんけしてん　ころしさハたれとこ
ふりしろつゝく今りハれらんせうしく
いりなつるま　大臣の源をとんとて
またさ葵れ後おしまえらり入ゑふく
ろとみのむかしこき
源氏君のはかとれ施さりしと出語つる
為さるの事といつりトの有まるひすて

或抄に云
桜のもみけ
こしもかりけす
して身ハうきさ
あしこを見の
さ海ハうしねと
とひ人のなさき
かうし
かるつらん

秘
いつれも源の事なり
夢もう世語源に今の事多くあるに
といふ蜂のまねびのやう也 弁曰
まなびなとて 秘 源の心
ものの人々しくは おもしろき事のかきて
枯備し語也といふ心
礼にのすなりまことには見る人かくす
まなり語て枯備し語教なると
をこうしく思ひなりけり

いつれもかなしきを 手あかれ事なりや
かつのもやまとのも は 語なり
いつれもはんなかるも 詩歌と云事まで
かんなとにとまらひ半語つらなりけり
りしこれ也にや は 見ハ男字也
秘 源の本語とかけれは也
よきもくにみそてまつり 秘 第子他
たとれはいとよきくまうへは口をし
こなへしと察してかけり

ふるき枕古き衾

付 鴛鴦瓦冷霜華重 舊枕故衾誰与共 秘曰 長恨歌 文集第十二

弁 長恨歌ノ唐本ハ多分 翡翠衾寒誰与共とあり 舊枕故衾とあるハ和哥の為にやあるへし

私云 古文真宝ニ所載 翡翠衾寒ゝ 白氏文集第十二唐本ツハ師ハ家ニ舊枕故衾誰与共ゝしむ叶

源氏に云 永正七七三記之

源
うきまをいとゞ此つき秋風にあはれしいとゝゆらひよ

なれ
あはれさまさりてわかれし玉よりも
うきとこに秋の来ぬるしるき

秘
我からの葵の上も今はあはれかゝらりつゝしもあはせは色
きゝ 萩原 あはれとさましはるとも
りりはやれゆふなき泥の足をとまた
様へは私に於れ

閨中　花香れ川なハ女のうらうらとて
よめるうたむ面白し
私葉しうきさ字よ待人来て也つこさ
ども葵の思ひときつゝんとなれハ
やりて源の方かくもいとしうすく
思ふくなの中ハ我も此字とおもふ
きききまて思ひしうしやいく
君の花印し　秘　河海　連昌宮賦　文選
弁
とりしとあるとおもしとかきくり

かくれなき事亦ゝあり
は
いおの同詩に　重写日お遠あるや
めは事つゝれるまいや郢曲うしをなか
字をあらしめて南花の京とよめる
成実く古来此例あり此物紙にも
右将軍基草和秋とあり詩と章
初まつらし誦あり又四条大納言公任
の和漢朗詠集よおかし古集のうを
あらためて入られし事也文選連昌宮

賦ニ獲落危慵懐宇秋有ニ秋風也
あるとき秋ありとあり又楽天の詩よ
可足禅房無換おとあるとも不
足禅房無換到と改さる定家の例之
陰林古柳疎槐春無春色獲落 ―
原 者ありて艶はなりぬる席言ね露打拂ひて来語
抄 ところと弁よ見るへき字の揺もなり
なられさる時とおもひやりさ二首
ハ文集の二句を思ひてよめるなり

此句よりせてなひのよきなり
本抄ありし二ハ夜より冬をてさき拖
露さあるあしたのりハ冬なれり
一花さけりせしとそし二 定家
私初文字給句なりぬへし
一日の花るそへしられて侍しまり
一日お我りられしおりなる花とおもひて
草られの難りおるとゝみ語て答
りしまり経その花の枝のよめる

の中に侍りてあるといふ
秘
上の詞に枯るゝ下草の中にりんたう
なてしこさくもをかしけの花之　弄日
弄云ハ　床夏を床に用ゐる長恨歌
のおの心あり
宮にはらんせさせ給
弄
大臣した府のうせ給之　花大臣の詞
いとひうき事とハ
秘
葵上の事ハ無常にてうちふしあれ

事之宿葉を思ひてうちむすほゝれしと
もとおもれしハ忘れきハ凡情の事に似と
相さ海くにあるさ面り給ふとせ
かつてハつゝく　関中姉の事ならぬと
うしみて思ひわきわんとの思り
秘
此は一段葵の事や　かゝる事迄も
常なきされと姉の事つらねハ
おの世にてつゝき事なしかゝらせ
ひとさ海はんとくされとるとゑ

さハ思へとけしく
おのたねハ　秘　源と花の物よみすし
侍るまゝ
此二文ハわりさとおもしろき經
かしくりおハせし　葵へ源のかくし
しかり事之それこそ物思ひゆへ
り今も花人よみすてゝ八朔の
ひかりうしうひかうやうちりと数
き源ふたりのさ油之

夢のたかりハ經ハよろ
秘　これ大臣の詞ハやうおもしよろまとれ
人も思りかなハうちの源事と
くのいふよやまきハ夢とみを源
とみかやたきられ人をみえよてなも
のしのみと人てにの源事や
いつまよてもよきせ　弁日
関守さ大臣なし　承秋夢とハ源の
松云源と大臣との内裏まて　清書之

いせりうきさうしよれ　久しくなりぬる事を
あらきぬよまうでて　秘 業平の心を
とめかきて　とかれたるかるらむし
後へましけり婦人まハ　秘 源の院京あさ
おもり院京あさくさ事とひけむ
よりハ院までの跡をとひなり
いとあはれなり　源をとはんして文院の河辺
さらしけて　精をといいるすと例を
中将のなれなしに　秘 叔つかさの心方なり

在婦の夫して　秘 中将の済うらなりさ
へまりての作く　業平川のまてまゐり　秘日
思ひつきせぬ
中将より作の例く変れ事
河 原の院にはの林多くしをのこ
思ひつきせぬ世中のうき　はかなみ
つねうき世を　秘 源の院の例く細く
中将よりもれ事をつひあはり
みてけり

私世間にせ者ハさる事なれどこれ
ハひハ用ゐらるゝふつまてい
とりしくゆふかりなき
いふまてもなしとて　抄　此羽遣云くゝり
へのかくなきしいふゑとふくめり　寿曰
ゆきしれとりなくて　関半さうぬられ
たな前つ不へいは中よ杖のおりよしと
の袖にきしきハゆしてよし
むかんれらくのほうもひ女の帖下かさね

え、いゆきさ行つゝ
無文の袍ハ衣穀平絹也ハ常の袍
れとし冠も無文也纓服ものさき
さしきろかねなく　寿曰
寿　関云無文の冠ニ轄いり
一着常の冠ハ有文の羅也服之ハ無
文の羅を用事也　抄　悝服之
私云近代有文ノ羅とをろむる
ゆ条まて文となよく見界候之

今の世のハ清書文の羅也
こゝにも〔秘〕冷泉流に
ふけて　書文にても宜しく書ね
かの御経へと呼合書り経へ方やうに
見すなり二条流へ退出しなり
是もしと作りなし〔弁〕源の四つり
それ西と見経よつまても葵方
ようぬりしへてれ四と思はれ申さる
かのいろみくろしくりつる

〔秘〕葵方の女房ちまと思ひ出給ひなり
〔弁〕かるみくれしハまし渡さる給ふや
松居並えし河ニアリ
私居うし扇しへるえ
流さりそくふてまつりえて
「な」源氏ハ二月の服られハ八月より十
月まてゝ今ハ除服し給ふへきゝ
〔秘〕花鳥の説おもひつきし除服ハ此り
ねるへし　されハ此説へ言様　紫来

と二条流迄も深れつよふまみ給
東の対まてさのため給ふなるへ
しとし武材之浦流て花鳥の流れ
わり流へ事り給ひきりて　とあ
らさめて紫のおハ十すり両対への
給ふなるへし也て花鳥の流しを給ふし
弁
脂衣とかへ給ひしやうし

みのゆは　秘　二条流の両対之
衣の入れのしてつひ　十月更衣の流装束之
少細とりまとなし　かなのつひなと
ハりとうさい重て少細とりし流
きらりし浮の於手主之
ちいさ紀れ本丁　さし本丁あるへし
衣ぬうまれ乃もひきて重まて八性常

まてもえてぬく本丁とさして居
かくゆく之
あへぬ事うし　宣うり下りさしと之
かうけ　大納言之
たふ事うく　抄 若つねよう似りふと之
ちうりりて　法の世之らうりけて之
日比の抛うり　其より、法成寺家みて
まり給いうれと世之の語ふく
いぬく去　少将葵の事之

去はしとかくよ　抄 二条院の東対うて
めへしうち中宮みうるし行らや
いとりしうさへや　出しなうしく
みうし給てたもしせての給う
詞なうへし
枕あやうく　サうえ日件せ
成人とうさ　めへひ下　抄 草子の説
うれまれサ納言のあやうくなふ
回とい乃草子地く

立かり　葵れかりよみお人なり
花宴りきん人とお納言れお
やうしおりふなり
わか流かさ　二条院の内源の常に
まみ源氏君のさいし之
中ねの君と　秘 源の宮女之
弁 詞ともなし　東対よしてれあります
ら世まふ之
あなたハわか君の流りしふ

秘 ゆふきりや　中書ほし
あゆれねりれゆくり　夕きりれ流めのせ
うきれ流をすりゆくりふや
たうしもうれす　関中夕きりのさ
へもあはまてハおりうちたゝえ
とハおりしうれぬと

姫君の御事も　君のゆかり遊び

そのすりまふとき
まけたまらぬかと
むすし新枕もおろ人こさ之
閨中芸十四ヶ年十四まて嫁と申
まけまして姫　菊香の箋ふくし
高しぬらくこふる事　ともゆりすゝ之
おるさまて　暁の雨のさいかり
基石ら原人つさ　閨中文字の様と
かくして以ひあつるにし

九禅　篇突　篇冠
武拵云原人つさ三しハ文字のつくりと
篇とをわけし作りとかくして篇を
もて何しい文字といひあつる
れふ人ハ嫁くれとし成へし猜嫉
ふとをしへ基石ら原人つさうれ
大先中先の事まとしへ跡事文左
うきの文字とくして何篇の文字を
いひておもゝ事ゆうまや

私云　私鈔へし
うりくしきよらと　いふくねらしう
といふよりは胡まて世の下れるから
ぬるさ事といへり
たかしなおちくうるか
おさなきかなのおりにぬく
成ては中しきこくみゆる
事なしといへり
私云夫婦のかたらひは何かたき

なさうきとのこゝろしき源
たしさうかたしはおさなくらふむれ
源し事せきひゝしとは男女
かうひおくきはしのねなく
人の事ちめ　彩柳し源しすみ
屈きすうぬくつふむつれ
ゆくされとそのけちめえさ
ともくふいひのみつや
さしにおきて源りぬおしさあり

色ハしほてしみはの事之
君ハまうり給ひて　[秘] 源氏我方へわたり
さ夜よや　廿日
御硯のはこと御丁のうちよ
[む] みをきてすゝりもふたへてとき源
別れぬるし給へといふ之
かしらもさけて　出のさ也之
[源] あまりもへてけふ來とかさねすまうれ中のとと
[秘] 源のゑ一てとき給へつ之かへてと

はやうしもいりね胡のみとうた
よりていひきつし給ふや
御手あやうしハあらさきうちより
おしくりう給ふし物とく

かゝうれなれハそすまんとハ　[秘] 世にそれなよハ

源氏まめ人のやうにして自然いふ
事あらつきをもきせ紛へことし社思ひ
給ふよなりひのおに思ひかふし
私云 おもしいつもそれまでもなりおあ
菊人かりすこし初枕のさまなどひの
かるは思ふらくおさなきさまなるも
あさましう案さる 紫の心
ひきつきれなう給て 源の紫なるべし
うちやましく思給ふらんハ

何となく思ひ給へるや
れうひさなき 紫のさまに
人もいかなる事と けしきを人の見る
へしと源のいかなく
れふすましを引やり

河 論語云必有寝衣長一身有半
注云 孔安国曰今之鴛大被之文也
又云文繡双鴛鴦裁為合歓被 鴛鴦被ハ錦ノ被之
衾ハ夜衣之 紅衾をもて四角四方ノ中

重アリ
うハさしれ経あり女房入内の夜女
房の沐母儀としてまいり給例也し
私曰此外略之
茂ゆの流いへりし給ふ
出代とそうきく
りしくさうふみえとまいりし
今はとハさぬしれはあしとらく
きめて宮に入

流すまとあけて　流をあれあるとく
わすれ流さ海や　若しとしきや
いとしうらけく　源の心よ出のさ海
をらうくおよく
ねのこれよう井
群忌隆集曰十月亥日作食之令
人無病也
掌中暦曰亥子餅七種粉 大豆 小豆 大角豆
胡麻 栗 柹 糖

かくれおもひのかと

秘 源の之人ハまつらせさう之堂かり之

弁 堂かりへまつらせたちりや

ことしこきぬ

関守なしよハ世れ葵女の証とく

君是れたに　源也

かすしり更衣ぬよハあつてかす

のかれよ

秘 新枕の三千束かりぬの事との

一ぬ、　弁日

関守なすしおきさはいあて

といハ三千束のかりぬハ一夜ぬるとも

何 しつか実子かりぬハ女と三日束餅ハ一夜

うれハかとしよハあつてといて

ふハいくしこき日　何 重日と忌と　弁日

秘 歯症のまさらりこにの症

乞とき地よて　惟光やとしんぬるえ

心とききぬく

哥ニハ数
定ハトミし

あいなめなし　惟光朝臣の心と
いつくしさも数神く
日えりして　是も惟光かはかり合て
や詞くいましくしきりとの給ひより
けてやかり

さても猶のこハ　閨中女の子の餅三日か
まハなりあしきこと源氏詞ふしか
ちかぬあおおうちさてせさ　辛　秘日
は
女のこれ次の日かれハ猶のこを惟光り

南庭ふちうやふくらぬ風月よハ
あさうれ　秘説あり
辛よハ数定ハトミし
花
嫁娶の三日よあさ夜餅と祝みに
とし事ハまつよかぬ事　人の元
まうけよハ世俗よ三日餅と侍る事
あり枕てそしいかれあさとれ
くるんハ女のおやこれよしよあ人て
二ひ又母の家よ久かまりぬかれハ

偕老同穴の契と承てさてと云
文字も嫁（帰り）の字をもちゐる女ハ夫の家
を我家とふへきよりしやさて餅を
用ゆるも つゐに男のりにて夫とおもへる
なく嫁娶の日のさ 衣装うともをもり
もはなく栄花物語本十三にみゆ
ありわらぬ事やくこれふされ事これ
うらよさりけるさしいれておりし
もしつらんとぬいとをしつかれなみえ

世俗にこれハ比室の此女と小一条院
まむこどりの時のまへ三ヶ一と読
よ三杯一貝のまへよみうハあやまれ
高事やもうハ此餅にて祝ひをなり
なく秘説これあり おまちられし
仍
紫明抄云三日夜餅三し事あれは秘
事とし
一説云三日夜の餅のゐハ女の年の数
を調進する也大十にてられハ十とし

とこて餘とやいへといふなるよ
三ケ一りといふれなきれりとりて多粒
きこ降りなりとうかハ推見ハてて
ありんのけす出之れ年齢といふり
と推之しきりなく
待賢門院の御三日夜餅記　徳大寺左大臣記
葉椀筥　文露毛　掲具　書居過れ硯筥より八
こるさも大きもちひ之飯小器三よ白色
乃餅のまつきと此蓋同の盤具盛

ふらやすよ三日目撰よふそく盛て
御前の毫ハ銀よて別漬とてりて
露れ三つよ此箸とく久させて御
折あつりよれ出さうて之とあり
武抄葉上十四よ如経ハ八十八とも丙
云み字といふみくえひとハの経り
此物候よ三十九大事の内ふれハやす
何ろんの其ハ三十ケ條やすめいの余孫
のこれふらるうの弁りのふろく　一

象の秘密ハさまにいつれも大事におれ
さりなから昔より秘説とあれハあ
ハすへき事にてあらすその證てお
りまうし候かく
乙川かひかへまても　源の正蒼之
弁
三光一まてりしも説わりとし　口傳
三ケ大事此一之口傳あかり　秘日
関中口訣とりくりて三ト一下之
秘
気之そ　惟光かやすて給ひてくら

こらを拙れるさ海中しおすまし
手つてとめつり　惟光の潤るさ之
里まてそ　惟光か家之
宿ハさつらへまし
紫此核畑と源のよりあまし
年比にのれまと思ひきさてつるハ
形枕のお小紫をおもりし八事此相
おもあつれとく
私おひみそみちのやうらかれハ

むかしハ地となもハいひける
此方あたらし川辺よハあかね紫
人の心うつろひてあはれ
新枕のいかも世とともに思ひ入れ
しかしハ一夜もつきて人事かなかな
きとかやかくしとしまきに思ひの
ましらと我れ河原の左大臣
夜あかして見そめまいらり　惟光の思ひ
後の事も思ひて夜あかして初まや

むつひあはく
つりしくや
業平中将これむつひく　紀惟光のむつひしてむすひける
むかしへの弁　業平中将の女
紀惟光のむひむすひしゆ
かくこれまことひとつ
香臺選或香粉筥　香臺選ハ宝之
まつ潤度や読書と入る墨之士託也
下略

一説曰　香粉呂ハ　香道の具なり
伴の懸子よりちいさき箱なり　武鏡
呂武　白粉呂武　蓋掛箱なり　香ハ
蓋箱之粉ハ白粉くさしなり箱に納むるよ
りて其箱を一名と香粉呂と云之し
ゑしるよれ於ゝみに　惟光の弁よりひ
こまりすゝみ
あかりしこあうさにうし　秘一本あさに
うつしありいつまも人よ志るすると

以上　弁日
惟光ハ弁よとしありなりし
ある也と惟光と　弁の仰
秘 弁ハ何事ともしらぬに
あさうる事ハ　弁の詞也　秘 わきまへしらぬ 弁日
まことにいまはさうらふし
む いまはなるにとありてさうらはしとも流
秘 おりまこと 一流ありおほよ伝すへし
別勘よあり　但此ハ何となう事なと

いふて事なかんこそ
関弁あきらかといふ字は事なり
非光のいふなり
よく為しも得べし
此弁さハあやまりゆゑをと弁まへ
非光の障りていふ詞也
又武がよハよろこぶまじき得しとは
弁り帷光よの所なぞらへも云れ
事ハ中まぜじといふ色なき詞

いふも為しらしといふ
何さうの事いハいかにもまぎらしと也
わざ人にて　弁君の事也
君子まいれ　源の芸よりひをよく経
へしとくまいのとハ何事も為せん
のましふをし　へきて未まんへや
はじめて此ることを彼りて
退　食ヵ退　わらゐの具也
志しこきなりれ

秘
ちらくつまつり人ここく来月
流さしもと　秘　わら井此けりし
けりく　秘　堂のあしうり
少納言ハいとかしりや
嫁娶ちと此気利あらくいやそうく
あらんと思ひしとゐや御此事て
御心のつきたりを流進切ありとう
ましくうみさのこぼれさうゝ
さてもうらくよ　秘　少納言の無く

我ハ御あり人こい事ととや
私云おまお納言ハおしつらてろ
うしくやおすさんとハ旅光此をと急
お納言よハ志つせまりて来世てま
らせうるゝお納言ハ明日朝えり
めて去りし
秘　旅光之　頃の御つ事られり
かの人も
くらんとお納言うし此果うり
うてはハ　御り来世とりん神頂てはハ

こひうきは思ひのたね猶之
哥ハ巻也　源の秘しおかれし
かなひ給ひを　源の御思ひ給ふとかく
いたしと思ふすと　源のとかりとなり
しりたまふ人もあまたあれとも世は
ハおもひなし給へかたきまゝてその
かはりとや
紫の花の心ありしくて
若草の紫の花と源さへあて表

をやつさてんしてうらうくま
秘　弁　同し
私　紫上をハおよそ初草の若葉なとに
てありし此初の文字を自然の目にせ
いと哀しくて　かへ(たに)ハせん事ハ秘すへき
世中のいとうく　源の御思ひ有るなき
くりかへしけれ共しかれと
せても葵の事なとかなしくや
ましまさるとこつけの給ふさ由之

今さゆさハ見しらしけ哉

秘 上后ハ弘徽殿ハしき殿ハ藤壺之

む 御遊覧ハ勝月東之御遊覧ハ内裏

のかれ勝ちて裁縫させて下之絵たま

乃女のなりて織せ

たねまのこ心るを

勝ハ源氏のこ心とかよひしかさ

けまてさ中くとをりつる

秘 蘂上りて成瀬しつゝありよるて心

右大臣ハ思ひより給之

秘 源氏の事と弘徽殿ハ

いとミてしと

さも思ひより給ふまて思ことに

弁 弘徽殿の心

文つくるもおもしろく

は 古今集と哉て也りうれしみたまへり

たくしくもおもわれ

併物拠紙まとてありけれハみもなく し

しりす

祈俊席云何ゆへしれおさくし給ふハ
をくしくよみなれ給ふなさくしハ
長し成長くおとうしこうし給へ
しおさくの詞よハかゝる人これより
思ふし関年おさくハ文つくるとも
治定ゆし無ゆし侍りし何ゆへ
と源をみてハなかすゆへよりさて
見人なきらんゆとおもひけますと
未もとしかくての　彗　源の心

秘
源も物をとハおもしれと今ゆる
ふしうし思ひ給ふへく
私足ハ芸のおもむき成へ
かくてなりひさきまても　芸上よてさ
さゆるんとく
なかしさらはいり　葵の物事を
うせし事へ
うれ文字ゆゑ　人のうみも桜まり
ありきりとおもかしまれると云

てきよかの文字かしいつかいさゝう
なもかせていつや
はとれまく　六波羅をむ書は八
んとうゝ事あるへしとゝ
うしろの方ゆきて　はずれのとし時く
れかよひ下るさいあらとひ合給
へさんをせうしハよろしさしと云ひ
給ふく
たかしるきれ　文字かのつゝき

ふしハ切られさしかたとみよとの方
りハ源のたかひ給ひねとゝ
これ姫君といはして　秘　業之
又ハ其くの文之業の俗姓とさぬ
ゆくよおけうし人のあまりんとゝ
ちう文り　其うぬく業れ系図式
あらハきんあく
誹りされ事　業のりさゝ
さよおうりとみ　業ハ彩花のつち

なりひらもみ給ふや
年比こゝろよ　そも／＼葉は源氏を
うちしき　おりふしをいひのべたり
さやうのものあはせ
正月よ同じく見合を給はぬ也
あはれをかけれ　葉のうへにさ海
きうしうもいとおもしろきも　源の四葉れ
さまし　と思ふべし
うれしは涼さらぬ　秘　年　川竹日　閏年日

は
みちすがらのいとあはれ
うれしき所にてまひてさしあへ
年もくれぬ　む　源氏二葉十九にあり
給ふべし　秘日　年日
花よりまり給ふてそ　桐壺やまりふみ
と源のまへに給ひて内裏書文
へまさりけりあるべし
思ひしけり大殿り
くさきさた氏へおいはしけるや

むしの情事ともを
こしの始のつもとより如くし
いとかくさへ
源のおりさまにいよいよゆめのうきはし
多くらく　又大尽母文あるべし
流るゝくれくりしう
源のいよいよ抱しくも見えそひ
姫へうき波し
みちおいてはかなきよ

このいゑを
古人のおもて
傚ひまうす

葵の里亭源て須磨のひとゝえ
人くもおもしらう　古くはきよう姫女
房ちよ之
まり尾見えてまつり　夕霧くここ是
わりひらに　花鳥とはちそあり
てわう尾のそしてくし
春文の流れ菊しき波　夕きりの冷泉の道
見えてまつりともむまて
冷へ夕霧の紙絹つりと人やかましめん

と源の君ハ源之　源と葵ハお近
御しつらひかと　さかへ
ほかゝりぬかゝり
みそかけれは御うちそへ
擬架　延喜式　御衣架之　衣桁　神衣
礼記曰　男女不同椸架不敢懸於夫
之楎椸架　注曰　竿謂之椸　楎杙也
今葉葵上の存日にハ同様に近付
かきしかいかしハかけかへしとくと之　礼記

の空ハかゝるへし
女のかなしくぬ
礼記にも男女椸架をおなしうせすと
あれハ葵の存日にも源のひとつ
いかゝけるまてハまへかれ椸架を
かへておなしにかけならるまして
女の椸架のかさハぬかゝ御しさ
とみゆへし
式部卿説に衣架ハあて字之椸架なり

はいりて障子のかみにて衣をか
くるゆへに
かふいふらしく思ふ故人思ふなと
秘 これより大臣より此朝之年始なれハ
葵の祭儀を思ふれとも源の大将
其ゆへふかくおもはれて思ひわぬとく
ましよするひとけるはしまさひ
源の装束を大臣まて見またま
て見まし事又それも今ハ源よする

ありて見るあひもろこひもしと
ふりハ国つまさせ給人　関葵のおハ
せぬとかこらる様人
秘 好きる清く見さめて見てお清服
ハ何ましあるものもふかりハ祭
まつ給人とや
大臣よりのはれさせ給ひを早くして
の給ひてこのはハ源よ入れて又あひも
おもしとや唐衣さ世のうへとハ祭葵の

名所をもよむへし

又さきにて　いかさまにもまれ外に

今まされつけしてもありけるや

かきれけふさしまつるへき

秘　七日の元三ハ月よしよろし語て

人をそこきく人なりや

札之日よみ語へとおほきハ娃史に

名もとり高もをされハ太今

源の是語れハ曲かりおさんや

是して　それときさ語へかや

かひらしやとて

札されをはあよ早下寺かへく

是ハ語ふ名もとりさ改も心と也

されともそれかひもかりくかり

ぬし早下寺かりしの義也

去ル所く

こほりましかハ　秘　源の心之絵まかけ

語へりとおもふなり

秘 今日源の浦ハあらくハ口おしかるへきこと
流れては
尋やこきみかとを　源の絹
秘 川かすし　関守日
河原 おもしくゆかうしと言ふせれ去
やきぬかしうひとらく
弁 此寺ね南せりともみなと為狂の名を
の様なくし　只去のしめふ見えまい
らかんの公りまてもおろへきされ

秘 戸もかうてもうれしきこと
えこさてさせ
葵の上祭にあり
源 あはきうしふおかなし名裏こそハ源氏あらはすまう
何ましこうしハ数年く　秘 下るかはた
去年まかりうらしや
えしそ思ふまく去りめね　さまて源の絹
左大臣 おもしきうしもいそれふ物ハあらぬ人の源くより
秘 哀傷なりてよハおすして如く之河と
葵の上れしつまあかうしきとしれ

何しほりからきましめつくらみされ
ころりとえありぬる人のとかこつけて
下此あそひの所ありけり
何
何かしきこえしとハ之とこれまよ
ころ方ありぬるにふまれたけり
此川ありよをよりに
とろるる人こと事みそ何ゆめや　東平池
武将三人を源氏も太夫も多く八州
と思ひ斯れけるひてもつともとて

源平かんちうすうしらみありぬる人の
問しらみかりしまつる四をいかり所
むとろぬへき事まそハおもしとも
当く時支の網あらひの代越傳此代心
此とひとも我宗して左る威へし